

学力向上フロンティア・ハイスクール事業

新しい学力観に基づく評価の研究

～観点別評価についての考察～

はしがき

は し が き

校 長 酒 井 保 廣

新しい高等学校学習指導要領では、完全学校週5日制の下で、各学校が特色ある教育を展開し、豊かな人間性や社会性を育み、個に応じた指導の充実に努め、基礎基本の確実な定着を図り、それを基にして、自ら学び自ら考える力など、21世紀に通用する「生きる力」の育成を目指しています。

本校では、平成15年度から3カ年間の文部科学省の「学力向上フロンティアハイスクール事業」の指定をいただき、新しい学習指導要領のねらいとする生徒の「確かな学力」の向上のため、特に評価規準や評価方法についての実践研究に取り組んでまいりました。

この新しい学習指導要領で目指している学力は、これまで同様、知識・技能が大切であることはもちろんですが、それだけではなく、関心や学ぶ意欲、思考力、判断力、表現力までを含めて学力とする考え方を基調としています。言い換えれば、これからの学校教育においては、知識や技能のようにこれまで比較的評価しやすかった学力だけでなく、ともすると見落としがちで評価しにくかった生徒の学ぶ意欲や思考力、判断力等の能力を一層重視することとしたものであります。そしてこの学力は、生徒一人一人が身の回りにある社会や環境に積極的に働きかけるとともに、現実の社会生活の中で、また将来にわたり自らを生かしていくことのできる資質や能力を育む上できわめて重要なものであります。

この「確かな学力」の向上のための、生徒の学習に関する評価は、学習についての指導と同様、教育活動の根幹をなすものです。しかしながら評価については、様々な課題が指摘されています。そこで生徒に学習指導要領の目指す学力を身につけさせるためには、この評価の重要性と機能を認識して、有効にはたらくものとするのが大切であり、その改善を進めていくことが必要です。

この度、本校では、これらの評価についての実践研究に意欲的に取り組んでまいりました。これを機会に、生徒一人一人の実体に応じたきめ細かな指導の一層の充実に努めることができればと考えています。研究内容が十分ではない点もあるかと思いますが、これまでの成果を手にとって御一読をいただき、御批判をいただければ大変ありがたいと考えております。

目 次

第1部 学力向上フロンティアハイスクール事業について	P 1
1, 研究指定の経緯とテーマ	
2, 3年間の研究内容	
第2部 観点別評価総論	P 6
1, 観点別評価Q & A	
2, 職員の受け止め方	
3, 「関心・意欲・態度」について	
4, 評価規準表の作成	
第3部 教科別評価規準表の作成例	P 2 5
1, 国語	
2, 地歴公民	
3, 数学	
4, 理科	
5, 保健体育	
6, 芸術(書道)	
7, 英語	
8, 家庭	
第4部 まとめ ~評価を見直すことの意味~	P 5 9
参考資料	P 6 3
フロンティア・ニュース	

第1部 学力向上フロンティアハイスクール事業について

【1】研究指定の経緯とテーマ

平成14年1月、文部科学省から小中学校に対して、「学力向上フロンティア事業」が実施され、「確かな学力の向上」という目標に向かっての研究活動が開始された。

さらに、翌年度よりその高等学校版とも言える「学力向上フロンティアハイスクール事業」（3カ年）が実施されることになった。本校も生徒の学力向上の研究のために、この募集に手を挙げた。

全国39地域337校（内訳：国立1校、公立323校、私立13校）が文部科学省からの指定を受け、それぞれの学校が独自のテーマを設定して研究を行っている。

千葉県では10校が指定を受け、それぞれ教育委員会から独自のテーマが与えられ、研究を行っている。

その中で、本校には「評価の研究」というテーマが与えられた。評価については、平成13年4月27日の文部科学省による「指導要録の改善についての通知」の中で次のように示されている。

これからの評価については、次の5点が大事である。

観点別学習状況の評価を基本とした現行の評価方法を発展させる。

学習指導要領に示す目標に照らして、その実現状況を見る評価を一層重視させる。

児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などを評価するため、個人内評価を工夫する。

指導と評価の一体化、評価方法の工夫改善、学校全体としての評価の取り組みを進める。

学習の評価の内容について、日常的に児童生徒や保護者に十分説明し、共通理解が図られるようにする。

具体的な評定については、次の2点を示している。

ペーパーテスト等による知識や技能のみの評価など、一部の観点に偏した評定が行われる事のないように、「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、「技能・表現」、「知識・理解」の四つの観点による評価を十分に踏まえながら評定を行っていく。

5段階の各段階の評定が個々の教師の主観に流れて客観性や信頼性を欠くことのないよう学校として留意する。

この通知には新学習指導要領における評価の基本的な考え方が示されている。評価については高等学校の場合、学校ごと、または教師個人による裁量が大きく、今まであらためて見直されることも少なかった分野ではないだろうか。

しかし、評価とは数字そのものではなく、生徒の学力定着のための手段としても重要であり、そのために一度きちんと見直しをはかるべきであると、この通知は述べているような気がする。

これを受けて、小中学校では通知票への記載も含めてしっかりと評価の検討が行われるようになった。しかし、高等学校ではほとんど実施されていないのが実態である。そこで、今回の事業の一つとして、高等学校における観点別評価についての研究を本校が担うこととなった。

今回、このテーマで研究を進めていくにあたり、他県や他校の様子を伺おうと、評価についての研究をしている学校を探してみた。しかし、意外にこのテーマで研究をしている学校が全国的にも少ないことがわかった。私が探した限りでは、広島県で学校ごとに一つの教科を割り振って評価の研究を行っているのと、金沢教育大学附属高校でフロンティア事業の中の一つとして、評価についても研究を行っている2例しか見つけることはできなかった。（金沢教育大学附属高校はかなり進んだ研究を行っており、本校の今回の研究でも大いに参考とさせていただくことが多かった。）

書籍でも、小中学校向けにはかなり進んだ段階の各教科の具体的な評価基準表までできているものがあるが、高等学校に関してはそこまでのものを見つけることはできなかった。

つまり、高等学校における「観点別評価」の研究はほとんどなされていない現状があり、その点では今回の本校の研究が、まさに「フロンティア」としての役割を担うことになるものと考えている。

【2】3年間の研究内容

1年目

1年目は職員に対して、観点別評価とは何かの研修を中心に行った。観点別評価とは何か、それを行う意味は何か、また、根拠は何かなどについて、職員を対象に多くの研修を重ねていった。

職員の中には様々な考え方があり、このような研究を進めることの意味に疑問の声が上がることもあった。進める委員会の方も観点別評価について明確な答えを持っているわけでもなく、まさに試行錯誤の状態であった。

「観点別評価についてのQ & A集」の作成や外部講師を招いての研修など、理論的な研修を積み重ねていく中で、「観点別評価」とはどんなものであるかが、おぼろげながら見えてきたのが1年目であった。

5/7	学習委員会	事業の概要説明	委員長選出
5/22	学習委員会	事業の方向性の整理	
6/12	学習委員会	各教科からの事業に関する手応え、反応の整理。今後の進め方について	
6/29	職員会議	新しい学力観と評価についての説明。事業の立ち上げの提案	
7/8	学習委員会	研究テーマの設定、各教科の先行実践について検討	
7/17	職員会議	研究テーマの決定	
9/29	学習委員会	今年度の事業展開について	
11/5	学習委員会	異校種交流 近隣小中学校からの評価についての報告	
11/10	職員会議	今年度の事業展開について 評価についてのQ & A (教職員向けガイドブック)の提示	

12/1 学習委員会 中学校における絶対評価の確立について

講師 東京家政学院短大教授緑川哲夫先生

12/12 職員研修

絶対評価(目標に準拠した評価)について

講師 文科省教育課程調査官大倉泰裕先生

1/ 職員研修 各教科ごとの先行実践報告会

2/19 先進県訪問 岐阜県総合教育センター
高等学校における絶対評価の進め方

2/20 先進校訪問 広島大学附属福山中高等学校
高等学校における絶対評価の進め方

2/13, /16, /23

職員研修

新しい学力観に基づく評価の実施上の課題

講師 東京家政学院短大教授緑川哲夫先生

1年目の研究の成果

- ア 会議の場や日常の研究室の会話の中で、中学校の絶対評価導入について話題となった。自らの評価方法や評価内容についての話題が増した。
- イ 全教職員が絶対評価の方法やその意義についての研修を積み重ね、評価方法や授業改善についての意識改革を図ることができた。
- ウ 先行実践では、先生方の取組により、新しい学力観に基づく評価についての各教科の課題と成果への道筋を見ることができた。

2年目

2年目は1年目の成果を踏まえ、実践することを目標とした。具体的には、全職員で評価規準表の作成を行った。1学期には「評価規準」と「評価の場面」を入れたものを、2学期には「評価基準」まで含んだ共通の様式のもの(第3部にある作成例のもの)の2種類を作成した。評価規準表の作成にあたっては、仕事の負担が増えるという反対の意見も職員の中には根強くあったが、その意味を研修の場面などで何度も説明し、ほとんどの職員に一度自分の手で評価規準表を作るということを経験してもらった。

4/	学習指導委員会 2年目の方針の確認
4/15	職員会議 2年目の方針の確認
4/26	職員研修 ・全体会(30分) 評価に対する質疑応答 ・分科会(30分) 教科ごとの意見交換
6/24	学習指導委員会 夏の研修について
夏休み	船橋市立海神中学校訪問 各教科の代表が中学校での実践事例を視察
9/6	1学期分の評価規準表提出
10/14	職員会議 2学期分の評価規準表作成についての提案
11/8	職員研修 2学期分の評価規準表作成について
冬休み明け	2学期分の評価規準表提出
1/20	学力向上70プロジェクト事業研究協議会 (日本青年館)
2/8	学習指導委員会 今年度の総括と来年への展望

2年目の研究の成果

- ア 全職員が評価規準表を作成することで、観点別評価に対する理解が深まった。
- イ 観点別評価とは何かについて、また、それを行う具体的な方法のイメージがつかめてきた

3年目

3年目は研究のまとめの年として、今までの成果をまとめ上げることを目標とした。個々の職員に対する研修は行わず、各教科の代表者に前年度に作ってもらった評価規準表についての検証を行い、それをまとめる活動を行った。その成果が本冊子である。

3年間の研究を進めて感じることは、評価について、いかにわれわれ教員の知識が少ないか

という点である。また、従来の評価方法に対する信頼の厚さも多くの教員の声から伝わってきた。

しかし、それこそがここでもう一度評価というものを見直さなければならないもっとも大きな理由ではないだろうか。今まで特に意識することなく行ってきた評価というものについて、もう一度考え、評価とは何か、その根本から考え直すよい機会であったと思う。

十分な答えが見つかったというわけではないが、試行錯誤していく中で、教員の中に評価についての知識が蓄積され、自分の授業を見直すきっかけとなってくれば、この事業が一つの目的を達成できたと言えるのではないだろうか。

第2部 観点別評価総論

本校の研究のテーマである、観点別評価とはどのようなものであるか。この研究を始めたときは、そもそも観点別評価とはどのようなものであるかについて、私自身も含めて明確に答えられる者は誰一人としていなかった。初めの一年は、その答えを模索する時間であった。そして、外部講師の講演や中学校の資料により、ようやく観点別評価とはどのようなものであるかがおぼろげながら見えきた。本章では、その観点別評価とは何かについて、3年間の研究から得たものをまとめてみたいと思う。

評価に関する Q & A

千葉県立市川東高等学校 学習指導委員会
2003.8作成

「評価」に関する、教育学上の歴史的な展開を整理してください。

1910年頃、アメリカのソーンダイクは、客観的に評価できるかどうかを重視した評価観を進めています。この立場では、学力の実体を厳密に客観的に捉えなくてはならないということで、「教育測定」ということを強調しています。

これに対して、1930年頃に出たタイラーは、「客観性と言うのは大事だけれども、それは2番目、3番目であって、一番大事なのは目標(願い、ねらい)なんだ」ということを主張しました。そして、「もし必要であるならば、評価に入れなければいけない。観点として入れたうえで、どうやってより客観的に評価できるか工夫すればいい」としたのです。その当時言われたのが「測定から評価へ」というスローガンです。

タイラーの弟子が、ブルームという人で「評価と言うのは、願いやねらいは大事だけれども、それだけではなく、評価したら必ず教育に役立つようにすることが大切である」といい、タイラーを一步進めて「形成的評価」の概念を提唱しました。

現在、評価に関して求められ、強調されている「観点別評価」や「絶対評価」という概念は、このような考え方が背景にあります。

高校においては、どのような「評価」が求められているのですか？

平成13年4月に文部科学省よりあった「高等学校生徒指導要録の改善等について」という通知の中で、

「学力については、知識の量のみでとらえるのではなく、学習指導要領で示す基礎的・基本的な内容を確実に身に付けることはもとより、それにとどまることなく、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」がはぐくまれているかど

うかによってとらえる必要があります。これからの児童生徒の学習状況の評価にあたっては、このことを適切に評価できるよう、工夫することが必要となります。」とし、「評価においては、各学校において、観点別学習状況の評価を基本とした現行の評価方法を発展させ、学習指導要領に示す目標に照らしてその実現状況を見る評価が一層重視されるとともに、児童生徒の一人一人の良い点や可能性、進歩の状況などを評価するため、個人内評価が工夫されるようお願いいたします。それとともに、各学校において、指導と評価の一体化、評価方法の工夫改善、学校全体としての評価の取組が進められるとともに、学習の評価の内容について、日常的に児童生徒や保護者に十分説明し、共通理解が図れるようお願いいたします。」としています。

さらに、高等学校については、「各教科・科目の評定については、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の四つの観点による評価を十分踏まえるとともに、「総合的な学習の時間」について、評価を文章記述する欄を新たに設ける」としています。

いまなぜ「評価」を重視することが求められているのでしょうか？

評価に時間をかけるのであれば、教材研究や指導法の研究に時間をかけたい。「評価」は学期や学年末を締めくくるセレモニーであり、そのための説得力ある材料としてテストがあるとお考えの先生も多いでしょう。しかし、十分に時間をかけて教材研究をされた授業をやり、生徒がどんどん手を挙げてわかっているような雰囲気があったとしても、教師が感じるほど学力として身に付いていないと感じることも多くあるのではないのでしょうか。

教育活動の目標を学習を通して何らかの能力を育てることとすると、どういう子供を育てようとするのか、具体的にどのような力を身に付けさせねばならないのかという目標を立て、さらに、それをどのように確認したらよいかという評価方法を考えないと、本当の指導計画とは言えないのではないのでしょうか。Plan・Do・Seeと言われますが、プランの中にすでにシーが、

ドウの中にもシーがなければいけないというわけです。やりっ放しの授業ではどんなに教材研究をし、指導法を研究しても、やはりそれだけでは、子供の学習を成立させることはできません。これが、教育活動の基盤に「評価」と言う考え方です。

また、学校教育全体への結果責任や説明責任が、強く求められつつあることもあげられるでしょう。学校は、「公の性格」を持っているのだから、社会に対して責任を持つ教育、結果に責任を持つ教育を求めようとする姿勢です。

絶対評価と相対評価を比較してください。

相対評価とは、集団の中で自分は平均からどれくらいの位置にいるのかを見る評価（集団準拠テスト）です。これに対し、絶対評価は、ある一定の目標を手がかりにして、どの程度これに達しているか、オーバーしているかを見てゆくという評価（目標準拠テスト）です。目標を明確化してその到達度を見てゆくため、到達度評価（目標に準じた評価）とも言います。

相対評価は、個人差を明らかにし序列化をめぐって奔走するのに対して、絶対評価は一定の基準に達する学力保証をめぐって工夫・努力する評価ということもできます。簡単に言うと、相対評価が選抜試験と対応するとすれば、絶対評価は資格認定試験と対応すると言えるでしょう。相対評価では、難問などを交えて個人差を明確にするテストの方向に進むのに対し、絶対評価では、目標の達成状況を捉えるテストを指向するということとなります。

絶対評価の課題は、評価規準（何で見るか）や評価基準（どう見るか）を明確にしておかないと、教師間による差や評価のインフレ（実力以上の評価をしてしまうこと）が起こってしまうことです。

いま中学校の内申書をめぐって混乱しているのはこの点です。

なぜ、いま絶対評価なのですか？ 絶対評価の持ち味とは何ですか？

いまなぜ、絶対評価かというと、すべての教育的な活動は、「子供が十分に育ったか」どうかと言うところから判断されるという点から、目標に準拠した評価が求められているのです。学力差を能力の差と取られれば、相対評価で良いのです。しかし、子どもがどう育ったかどうか、子どもがある一定の何かを身に付けたかどうか、という視点でとらえると、その学力差は、子どもの努力の差と教師の指導によって決まってくるということになります。能力は、努力の差に与える条件の一つにしか過ぎなくなるのです。

絶対評価のテストでは、指導目標に関する判定基準に基づいて問題を作成し、個々の生徒が、どの問題をクリアできたのか、それは目標とする学力を身に付けたと見なすことができるのかどうかということが関心事となります。つまり、各生徒がどんな学力をどの程度身に付けているか、これが読み取れることが最大の持ち味です。差をつけると称して一部の生徒にしか解けない難問を出題する必要はないのです。裏を返すと、真に生徒にとって必要な学習を行い、その成果を的確にとらえようとするということが要請されているのです。その意味で、現在の高校の評価は絶対評価だと言えるでしょう。

もちろん、相対評価もあった方がよいのです。ある一定の配慮をすれば、教育的に重要な意味を持つ評価だからです。

観点別評価で必要な評価規準と評価基準とは何か説明してください。

今回の新指導要録では、高校でも評定の際に、4つの観点（国語は5観点）による評価を踏まえることが明文化されました。つまり、幅広い学力を評価することが明言されたのです。こうした観点別評価の信頼性・客観性を高めるためには、まず、どのような学力を養成していくかという指導目標を明確化することが重要です。そして、この指導目標に照らして評価規準、評価基準を設定し、学習状況や学習成果を適切に評価する評価方法を考え、これらに基づいて評価してゆくこととなります。

評価規準とは、学習の状況や学習の成果をど

んな点に着目し、どんな角度からとらえるかという、評価の視点を示すものであり、評価基準とは、学習成果としての学力の状況、程度を判断する学力評価の尺度を示すものです。「満足できる」か「努力を要する」と判定する拠り所というわけです。

適切な評価方法の開発では、ペーパーテストだけでなく、例えば、「関心・意欲・態度」であれば観察や自己評価票を用いる、「技能・表現」であれば提出物で評価するといった具合に、それぞれの観点の評価規準にあった方法で評価することが必要となってきます。ペーパーテストにおいても、各問題ごとに見たい観点とその到達度を評価できるような作問が期待されず。

なお、観点別評価にあたって観点間の評価の比重ないし軽重は、目標や学習内容に応じて適切に決定する必要があります。

新しい学力観では、なぜ「関心・意欲・態度」や「思考力・判断力」が重視されるのですか？

今度の学習指導要領では、「生徒の生きる力をはぐくむことを目指し、自ら学び自ら考える力の育成を図るとともに、基礎的・基本的内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努め」ることがねらいとされています。変化のはげしい社会においては、生涯にわたって学び続ける必要があるという発想です。こうした視点に立って、その子なりの関心や意欲、探求心や思考力等を育てていく活動を大事にしつつ、結果として具体的な知識や技能の獲得も実現するといった方向に教育活動のあり方を変えていこうと言うのが新しい学力観とされるものです。

しかし、こうして重視された「関心・意欲・態度」の評価については、学習の過程での評価資料の収集が要請された結果、挙手の回数や提出物の状況など授業中の学習活動への参加状況という、生徒がもともと所持している「性格・人物面」に着目して評価するきらいがあります。「関心・意欲・態度」に関する能力は、好き嫌い、乗った乗らない、燃えた燃えないなどといった現象的なものや生徒がもともと所持してい

る生活・行動面に着目してとらえるのではなく、学習を積み重ねてはぐくみ、醸成してゆくものとしてとらえる必要があるものです。学習を通してはぐくみ、身に付けていく「関心・意欲・態度」とはどのようなものか、検討する必要があります。

絶対評価では、形成的評価や個人内評価を重視するとは、どういうことですか？

締めくくりのまとめの評価ばかりでは、「しっぱなし」「されっぱなし」で教育的な評価とは言えません。絶対評価とは目標に準じた評価ですから、「どこをどう頑張ったらよいか」という振りかえりの活動をすることで、評価に形成的な働きを加えることができます。今後は、学習活動の途中で確認の上に立って、次にどのような手を打てばいいのかといった補充・深化の手だてを準備することが必要になってくるでしょう。

絶対評価を活かす取り組みとして、このような形成的評価という意味とともに、個人内評価があります。

個人内評価とは、生徒ごとのよい点や可能性、進歩の状況などの評価をして、生徒を励ましたり、努力を支援して学習へのモチベーションを高めるための工夫をしてゆこうということです。この視点では、進歩の状況を積極的に評価すること、指導の成果だけでなく過程についても評価し、学習意欲の向上につなげることの必要性が指摘されています。

しかし、形成的評価や個人内評価において、「よい点のみを見て、悪い点は見えてはいけない」「子供は本来良い点ばかり、悪くしているのは大人である」という評価観は誤解です。問題は、その「影」をどう見るかです。その子の弱点を断罪するのではなく、その弱点をどのようにしたら、その子の発展に生かせるかという視点から見ていくのです。「光」の可能態として「影」を見ていくという意味で、その子の「悪い点」を評価してゆくことが大切なのです。

講義式の学習と生徒主体的な学習のそれぞれの課題をあげてください。

評価の対象は、学習を通して育てた能力です。教師主導型の講義式授業では、学習内容の消化に追われており、どんな能力を身に付けるかという目標より、消化する内容が優先される学習指導となりがちです。こうした授業では、授業で取り上げる内容だけが意識され、「こうした学習を通してどんな学力が身に付けるか」といった指導目標を検討するための視点が希薄な状態で学習指導が展開されることとなります。

また、講義式授業で最も効率的に身に付く能力は「知識・理解」に関する能力で、このため知識偏重の学力観に教師、生徒ともどっぷり浸かり、知識詰め込みを指導目標とする学習指導に陥りがちです。

「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」といった能力は、学習の過程を大切に作る作業的・体験的な学習といった、生徒の主体的な学習を促し、生徒が主役となる授業の場を設定する必要があります。

しかし、生徒主体の学習が要請される中で、子どもは楽しく活動しているが、生徒任せの放任学習になっているようなものも見られます。これは、身に付けさせる学力の検討が不十分のまま、主体的な学習を行うこと自体が目的となってしまうケースに見られます。生徒主体の学習では、生徒が自ら判断して行動します。したがって、なぜ何のためにそのような学習の場を設けるかという指導目標をしっかりと検討し、生徒が学習活動を通して実現すべきことを明確に理解、把握させる必要があります。

指導と評価における目標は、どのような期間で設定すればいいのでしょうか？

これまで、はっきりとした形で指導の成果が見られるものだけを目標とすることが多かったと思います。しかし、1時間の中で効果の出るような目標（達成目標）だけでなく、何時間もの授業を通じて少しずつ伸ばしていく、深めていくといった目標（向上目標）も、さら

に、いつどこでどんな形で効果が現れるか解らないが長い目で見て学力の土台づくりに欠かせない体験を与えていくといった目標（体験目標）も、同時に追究していかねば、長期間にわたっての見通しを持った人間形成をはかることはできないでしょう。

こうした評価の改善に踏み切るには、どうした心構えが必要でしょう。

まず、「何となく大変そうだ」「よけいな仕事が増えそうだ」という理由で怖じ気づいてしまうのと、ここまでの話を理解して「これは小手先だけの工夫で凌いで行けるものではない。教師への結果責任が問われ、授業に品質証明書を付けることだ。これは大変なことだ」と感じ、怖じ気づくのでは大きく異なると申し上げておきたいと思います。その上で、次のような視点で、授業や評価を見直し、練り上げ、少し長い目で結果を問うという考え方に立つことが肝要でしょう。

できない生徒ができるようにするにはどうしたらよいか？

子供たちや親が本当に期待していることは何か？

現状より、より良いものを作り上げてゆこうとすること。

参考文献

- ・「教育における評価の理論」
梶田叡一 1994 金子書房
- ・「絶対評価成功の秘訣・運用の基本」
渋谷文隆 2003 明治図書
- ・「新学習指導要領を踏まえた指導と評価の在り方」千葉県教育庁学校指導部指導課編2002
- ・「高校改訂指導要録の解説と記入例」
工藤文三編 2001 明治図書

【2】職員の受け止め方

今回の研究で、一番障害となったのは職員の抵抗感である。高等学校の職員は、長い間知識の量を重視する評価を行ってきており、新しい評価について「面倒である」「従来のやり方のどこがいけないのか」と言ったような考えが根強くある。

1年目の2月に東京家政学院大学の緑川哲夫教授を講師に招いた研修を行った。そのときに職員から出された質問と、それに対する緑川教授の答えを紹介する。

職員からの質問(1)

社会：大学入試のところでペーパーテストに戻ってしまう。出口の部分が変わっていかないと新しい評価も生かされないのでは。生徒も混乱するのではないか。

国語：平常点の付け方でこちらが生徒から見られるようになる。

書道：評価をするとき、教員の感性で評価をしてしまっているのが現状。それでよいものか、いつも苦慮している。主観的な観点を補うものとして、書いた字数や枚数を評価に取り入れるようにしている。

数学：評価の持つ意味の一つ目は、評価をもらって生徒が自己向上できるものでないといけない。そのためには、生徒が納得できるものでないと意味がない。そこで評価過程の公表を実践した。

二つ目は、第三者がその人の能力を知るためのものであり、その観点から言うと、平等(?)であることが重要。

体育：この評価の改善は、行政指導の意味合いを持つ強制的なものなのか？小学校が絶対評価になり、順位が出なくなったのは、親として困る。全体の位置がわからない。

評価に追われて、安全性の問題などがおそろかになることを危惧する。評価データを数値化

していく作業が大変である。

英語：客観性の問題で悩んでいる。評価に時間がかかり、物理的負担が大きい。

英語：オーラルなどで40人の生徒を相手に評価をするのは困難である。評価をしなればと思うと、それが負担となって授業がやりにくくなる。

理科：関心意欲を高めることを意識して授業をやると進度が遅くなる。どの部分をどう取り上げるかを悩みながらやっている。

講師からのアドバイス

- ・義務制で前回の学習指導要領の改正で、観点別評価が取り入れられたが、観点別と従来の評定を並立すると、観点別がおろそかになり、最終的に進学に利用される評定の数字のみが重視される傾向にあった。

- ・校内で教科担任が一人しかいないような教科は、他校の教員との連携を考えること。

- ・国立教育政策研究所から出されている評価規準表を学校独自のものに作っていく作業が必要。その際、教科ごとに完全にゆだねるのではなく、学校共通の視点というものが必要になってくるのではないか。

- ・学校として共通理解のレベルを上げていく。全教員が他教科の評価の第一段階レベルの説明くらいはできないといけない。

- ・教科担任ごとに評価規準が異なると、不信感が生じる。複数の教科担任がいる場合は協議していく必要がある。

- ・物理的負担に関しては、毎時間評価をする必要はない。單元ごとに観点到重みをつけてよいのでは。

- ・評価に関して、今は国全体が大きく変革している時期である。子どもたちは新しい評価になれている中学生が入学してくる。そのためにも高校でも新しい観点別評価をする必要はある。

職員からの質問(2)

美術：作品を4つの観点で評価し総合評価を出しても、それが作品としての評価と結びつかないことがある。客観性をどう確保すべきか。

地歴：生徒が受験を意識する中で、観点別評価をどう取り入れていくべきか。受験という現実との溝を埋めるのは難しい。

国語：関心・意欲をどのようにしてはかるのか。それは本来評価すべきものではないのではないか。

数学：何のために評価をしていくかを共通理解していく必要がある。絶対評価は評価そのものをわかりにくくしていく恐れはないか。

体育：授業で常にチェックをしなければならないのか。そのためにはどのようにすればよいのかわからない。

講師からのアドバイス

・「評価をする人、される人、利用する人」が納得できるものでなければならない。

・結果から子どもたちの意欲をどう高めていくかが評価を行う意義ではないか。子どもや保護者に対するガイダンスが重要である。中学校では評価についての保護者向けの説明会を行っている。

この職員からの質問に見られるように、観点別評価というと、関心・意欲・態度＝いわゆる平常点、知識・理解＝従来の考査、技能・表現＝？、思考・判断＝？といったイメージであるように思われる。

しかし、この4つの観点は完全に独立したのではなく、それぞれを毎時間評価する必要もない。40人の生徒について、毎時間評価をすることはかなりの負担になり、それは不可能に近いのではないか。

それを4つの観点で評価するということがまず表に出てきてしまって、そんなに大変なことはいできないという職員の抵抗感につながって

ったのではないかと思われる。

3年間の研究の中で、教員が負担にならない観点別評価の方法も見えてきたが、はじめの頃は委員会でも、それが見つからず試行錯誤を繰り返した。そうしている中で職員からは大変ことをやらなくてはならないという意識だけが強まっていった。

【3】「関心・意欲・態度」について

特に、関心・意欲・態度については授業中の態度、積極的に発言したかなどを細かくチェックするといったイメージを抱いている教員が多い。そうすると、「一人の教員が限られた時間の中で40人をチェックできるのか」「積極的に発言することが意欲が高いと評価できるのか」と言ったような疑問の声が上がってくる。

この観点については、多くの誤解や問題点が見られるのでここで整理をしておきたいと思う。

a 授業中の発言

小中学校では、授業中に挙手をした回数を数えて、それを評価するということが行われていると聞く。これこそ、関心・意欲・態度の評価に対する誤った姿勢であると思う。

授業中に積極的に発言したりするのは、個人の意欲の表れというよりも、性格の面が大きいのではないかと。裏を返せば、授業中におとなしくしている生徒は意欲がないのかということになる。人前で発言するのが得意な生徒と苦手な生徒がいる。それはその生徒の性格の問題であり、人前で発言はしないが、意欲のある生徒もいる。特に高校生では積極的に発言する生徒は少なく、そうでない生徒の意欲をどのように測るかが課題となってくる。

b ノート、課題の提出

また、授業中のノートをきちんととっていることや、課題の提出状況で意欲を測ることも多くの教員が行っている方法の一つである。確かに、ノートをとっていないかたり、課題を提出しない生徒を意欲がないと判断するのは正しいかもしれない。

しかし、逆に板書をただ写しているだけの生徒がいたとすれば、それで意欲があると言えるであろうか。提出物にしても、もしかしたら友達のを写したことも考えられる。この方法も教員にとっては評価しやすい手段ではあるが、本当の意味の関心・意欲を測る手段としては十分であるとは言えない。

生徒は教師が板書した内容を丁寧にノートに写す習慣が付いている。それは今までの学生

活の中で身につけさせられた習慣と言える。板書をノートに写すことで授業に参加していると思こんでいる生徒が多い。

しかし、よくよく見てみると、きれいに黒板を写しているが、そのことと授業の内容を理解しているかは、必ずしも一致しないことがある。つまり、ノートをいかに丁寧に書いているかが、授業に対する意欲とは必ずしも一致しないこともある。

c 「関心・意欲・態度」を評価するとは

それでは、関心・意欲・態度を評価するにはどうすればよいのか。研究を進める中で、一部の教員の中からは、生徒の学習に対する関心や意欲は評価の対象とするべきではないという意見も出された。それは、この観点を評価の対象にすることを生徒が知った場合、関心のあるふりをしたり、評価のための意欲や態度を示す事も十分に考えられるといった懸念があるからである。

また、本来生徒の意欲は評価の対象となるべきものではないという考え方もあった。

関心と意欲と態度を一つの観点にしているが、厳密に考えれば、この3つには違いがある。

また、例えば歴史などの場合、授業を受ける前の段階から、歴史に興味のある子もいれば、はじめは関心がなかったが、授業が進むにつれて関心が高まっていくケースも見られる。この場合、はじめから高い関心の評価するのと、関心が高まっていったその伸びを評価するのとでは、基準も大きく変わってくる。

このように関心・意欲・態度の評価については、様々な考え方があり、また、評価の仕方もこれが正しいといったものはないのではないかと。

ただ一つ言えることは、生徒が学習をしていく上で、関心や意欲を持つと言うことは、実は最も大切だということである。嫌々ながらにやらされている勉強より、自分で関心を持って学んでいくことの方が大切であることは言うまでもない。その意味で、関心や意欲を評価すると言うより、関心や意欲をいかに引き出す授業を展開するかを教師は常に考えていかななくてはならないのではないかと。そのために生徒がいかに

関心を持つようになったかを、確認する手段の一つとして、評価というアプローチの方法があっても良いのではないか。

d 「関心・意欲・態度」の評価の実践例

「関心・意欲・態度」の評価方法は各教師によって異なって良いと思うが、本校での実践例をいくつかあげておきたいと思う。

数学

数学は問題に対し、解答の方法を考え、式を立て、計算をし、正解を出すというプロセスがある。その途中で、例えば最後の段階の計算を一つ間違えれば、正しい解答を導くことができない。つまり×ということになる。

しかし、観点別評価の考え方で、途中の計算が間違っただとしても、与えられた問題に対して、解答の方法を考えようとして、例えば式を立てられた、グラフが書けたという段階を、意欲と見なして、評価することができるのではないか。まったく諦めてしまうのではなく、途中まででも解答を導き出そうとする姿勢が見られるのであれば、それこそ意欲と見なして評価してもよいのではないか。

芸術

書道の評価基準表の中で、「筆・硯の手入れ、後始末がきちんとできる」と言うのがある。これは実技科目における、まさに態度の評価と言える。書道以外の芸術や体育などでも、道具の準備や片づけをきちんと行えることを態度として評価してよいのではないだろうか。

小テストの評価

定期考査以外に、各教科で試験範囲を定めて小テストを行うことがある。国語の漢字テストや英語の単語テストなどもこれに含まれる。このようなテストは事前に出題される問題がわかっており、その気になって勉強さえしていれば点数が取れるものである。このようなテストの結果こそ、意欲の表れと考えられるのではないか。単純な暗記テストは知識と考えられがちであるが、知識というよりむしろ意欲ととらえられるべきものであると思う。事前に予告しておいたものに対してどれだけ準備してテストを受

けようとするか、この姿勢こそ評価に値するべきものである。

【4】評価基準表の作成

観点別評価を行う際の基準となる評価基準表の作成を行う際にポイントとなる、評価基準、判断基準（評価基準）、評価の場面について整理しておきたい。

評価基準

評価基準とは指導の目標に沿って、例えば「平安時代の文学に対する関心が高まっている」、「慣性の法則を理解できた」など授業の中で生徒の到達すべき姿を表したものである。

これを授業の前に生徒に予告すれば、生徒は1時間1時間の授業の目的をはっきりとつかむことができる。自分がこの時間の中で、何を身につけるべきかを認識しながら授業を受けることは、漠然と授業を聞くより授業への関心を高める事に役立つのではないか。

授業を行う側にとっても、指導の目標を明確化することは大切である。指導の目標は本来評価とは関係なく、教師が授業を望むにあたって考えていくべきものである。それが身に付いたかを確認するものが評価基準である。

従来はその観点が「知識・理解」に偏りがちであったが、4つの観点を意識して評価基準＝授業の目標を考えることで、授業を見直すきっかけになることが期待できる。知識を重視するとどうしても講義中心の一方的な授業になりやすいが、その他の観点を意識した授業を行うと、授業そのものが変わって行く。

判断基準（評価基準）

評価基準が授業の目標であるとするれば、判断基準とはその目標がどの程度達成できたかを表す基準である。例えば、高跳びができるという「基準」に対して「1.5メートル」飛べればA、「1.0メートル」でB、それ以下がCといった場合、このABCの数値が判断基準である。

この例の判断基準はわかりやすいが、実際に評価基準表の作成にあたっては、各評価基準に対して、具体的な判断基準を設定していくこと

はかなり煩雑な作業である。評価規準を考えるだけならば、わりと楽であり、われわれ教師は自然とそれをやってきているが、あらためて判断基準を明確化するとすると、たいへんな労力を必要とする。

しかし、この判断基準なくしては完全な評価規準表とは言えない。また、生徒にとってはなぜ自分がこの成績なのかを納得させるためにも、この判断基準は欠かせない。

考査の点数だけで評価をする場合、数字がはっきりと出ているのでわかりやすく、生徒も納得する。しかし、多面的な評価を行おうとすると、考査以外の評価場面で、どのように点数を付けたかを客観的に説明できなくてはならない。そのためにも判断基準は欠かせない。

しかし、このようないわゆる「説明責任」のためだけに判断基準が必要というわけではない。これは私の個人的な体験であるが、例えば社会などで「 について自分の考えを書きなさい」といった記述の課題を評価する場合、生徒の文章を読んで主観的に評価をつけるよりも、客観的な基準を設けて評価をつける方が、公正さはもちろん、作業効率もよくなることがわかった。自分の主観でつけていると、前の方でつけた評価が気になったり、他と比較したりして、かえって時間がかかる。規準を明確化してから評価する方が時間がかからなくなった。

このような点からも判断基準の明確化はメリットがあるが、何よりも生徒に説明のできる、客観的な評価という点で判断基準の明確化は必要である。

判断基準を作る際には以下のことに留意する。

- ・ 単元に入る前に教科会で共通の基準を決める。年度当初にまとめて作成するのは現実的ではない。
- ・ 基準はあらかじめ生徒に提示されることが望ましい。
- ・ AとB、BとCの分割点（カッティングポイント）を明確に表現しておく。

評価の場面

「評価規準」と「判断基準」ができたなら、最

後にどの場面で評価をするかという問題がある。

観点別評価について初期の段階で生じる誤解の中に、「毎時間、観点別の評価を行うなど物理的に不可能である」というものがある。それは当然である。このような意見が出てくるのはここで述べる「評価の場面」という概念がないためである。

4 観点による評価は理想的ではあるが、実際に教師が評価を行う際に、それが大きな負担となっはいけない。また、評価に追われて授業に支障が出るのも本末転倒である。

観点別評価とは毎時間の授業の中で、複数の観点で必ず評価しなければならないというものではない。効率良く評価の場を設定することで、教師にとって負担の少ない評価をすることが可能である。

そこで、もっとも着目されるべき事は「考査問題の工夫」である。極端ではあるが、考査問題の中に4 観点を上手に組み込むことができれば、考査だけで観点別評価を行うことも可能である。

そもそもこの観点別評価というものが出てきた背景にある「評定にあたっては、ペーパーテスト等による知識や（中略）一部の観点に偏した評定が行われることのないように・・・」（平成13年4月の文科省通知）で述べられているように、従来のペーパーテストは知識を問うことに偏りすぎていた反省があるのではないか。「ペーパーテスト＝知識」と考えていると、では他の観点をテスト以外のところで評価しようという発想になる。しかし、そうではなくペーパーテストそのものを見直していくことの方が、効率良く観点別評価を行う際には有効な方法である。

今回、私たちが評価の研究を行っていく中で、いかに教師の負担にならずに、より良い評価を行っていくかを考えていき、たどり着いた一つの大きな答えがこの「考査問題の見直し」であった。自分の考査問題を一度見直し、知識にあまりに偏りすぎていないかを検証することが必要ではないか。

第3部 教科別評価規準表の作成例

【国語】

第1学年（国語・国語総合） 評価計画

担当 教諭

1 単元「三十一文字のメール・和歌」(10時間)

2 学習指導要領の内容

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

（「様々な表現についてその効果を吟味し、自分の表現や推敲に役立てること」(国語表現)の取り扱い事項を取り入れ、「伝え合う力」を涵養する単元として独自に設定した。）

3 5観点の評価規準

関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	知識・理解
和歌の贈答による意思の疎通という現代人にとっては未体験のコミュニケーション方法の実験に主体的に参加し、架空の相手に自分の心情を的確に伝えようとしている。	クラスメートの作品を鑑賞し、自分が最も優れていると思う和歌について、その評価理由を筋道を立てて話したり、自分の和歌に対する評価を的確に聞いてその後の推敲に生かしたりすることができる。	和歌の創作にあたって、既習の知識を生かしたり、資料を活用して古歌を読んだりすることにより、推敲を行い、限られた字数の中でのより効果的な伝達を工夫することができる。	中古の王朝文学を読んで、当時の婚姻制度の特徴から、とりわけ女性の置かれた立場を理解し、和歌の情景を読み取ったり、自分の創作活動に生かしたりすることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 和歌の形式を理解している。 辞書や資料を活用して、表現と理解に役立てるための語句、語彙、漢字等を理解し、身に付ける活動ができる。

4 具体的な評価計画

学習内容	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	判断基準（評価基準） A 十分満足できる B おおむね満足できる
「現代学生百人一首」 高校生作品の鑑賞	和歌の形式を理解し、プリントに示された作品に語句を補って、和歌を完成させることができる。 【知識・理解】	プリント	和歌の一部を隠し、空欄に当てはまる語句を考えて和歌を完成させる。
			A 和歌が完成するように自分で考えた語彙で空欄を埋めている。

			B 適切な語句を見いだすことはできなかったが、和歌の形式を理解し、空欄に何音の語句が入るべきかを答えることはできる。
架空の異性に宛てた 相聞歌の創作	和歌の下地となる場面設定、 使用したい歌語を思考している。 【関心・意欲・態度】	プリント	資料等を用いて使ってみたい歌語を 記し、和歌の形式に当てはめさせる。 A 具体的な情景を思い描き、適切 な歌語を多数挙げている。 B 場面設定は決められなかったが、 歌語を複数挙げている。
和歌の創作	和歌の形式に則り、かつ架空 の異性に対するメッセージの 伝達という内容面の課題をク リアしている。 【書く能力】	プリント 口頭 試問	下書きを担当者に示させ推敲を促す。 A 相手に適切に内容を伝えるため の推敲の過程や、比喩など表現 上の工夫が認められる。 B 形式に則り和歌を完成させたが、 推敲の余地を残している。
和歌の推敲・清書	古歌などを参考に語彙や表現 を吟味し、より効果的な伝達 を工夫している。 【知識・理解】【書く能 力】 自分の創作した和歌のイメージ に合った色の清書用紙を撰 ぶなど、中古の生活様式に対 する関心が高まっている。 【関心・意欲・態度】	創作 和歌 清書	清書を結び文にして所定の提出場所 に投函させる。 A 推敲による表現の洗練化がみら れる。 B 和歌の形式を守って作品を完成 することができた。
伊勢物語「筒井筒」 の鑑賞	本文中の語句について辞書で 調べ、適切な意味・用法を選 び出すことができる。 【知識・理解】 情景や登場人物の関係を的確 に読み解き、物語の内容を理 解している。 【読む能力】	プリント 考查	形容詞や助動詞の意味を古語辞典で 調べ、本文を現代語訳させる。 A 本文の大筋について、独力でプ リントに記入することができた。 B 授業での解説を経て、プリント を記入することができた。
「筒井筒」に見られ る贈答歌の鑑賞	本文中のエピソードの背景と なる、当時の婚姻制度につい て理解している。 【知識・理解】 男女の贈答歌の内容を的確に 理解している。 【読む能力】	プリント	男女の贈答歌を鑑賞し、本歌に対し て返歌が成立する条件を考察させる。 A 返歌が、本歌の情景や語句を借 用・または翻案していることを 発見することができた。 B 贈答歌の内容を理解することが できた。
本歌の相互評価	クラスの作品一覧を鑑賞し、 優れていると思う和歌一首を 選び出し、評価理由を発表す ることができる。 自分の作品に対する評価を聞	投票 用紙 発表	最も優れていると思う作品の評価理 由を述べさせる。 A 選出した作品の表現上の工夫(言 語事項)についても評価理由と して言及することができた。

	いて、自分とは違う視点に気付いたり、作品の長所や表現上の改善点に気付いたりしている。 【話す・聞く能力】		B 選出した作品について評価理由を述べることができたが、感覚的な印象にとどまっている。
返歌の創作	返歌の特性を理解している。 【知識・理解】 語彙や表現を吟味し、より効果的な伝達を工夫している。 【書く能力】	プリント	自分が撰んだ一首に対して、返歌を創作させる。
			A 歌語を対応させ、和歌による対話が成立している。
返歌の相互評価	言語表現の観点から優れた和歌を選定する視点を身に付けている。 【読む能力】 選定理由を口頭でわかりやすく発表している。 【話す・聞く能力】	投票用紙 発表	自分が最も優れていると思う本歌と返歌の組み合わせを選び、評価理由を述べさせる。
			B 内容では返歌たり得ているが、本歌に対応する歌語がない。
和歌の特性についての考察	なぜ平安時代の人々は一見不自由ともみえる和歌をコミュニケーションツールとして盛んに用いたのか、自らの創作体験をもとに、考察している。 【関心・意欲・態度】	考查	和歌の形式（字数制限）の効用、当時の婚姻制度への理解を問う論述問題。
			A 身分社会であることや婚姻制度への深い理解に基づき、人目につかぬよう受け渡しできることや、咄嗟に書き付けることができること等、字数の少ないことの実用性を発見している。
			B 自身の創作体験に基づき、字数制限は不便であるという見地から、教養を押し量れるもの、思いを凝縮して伝えるもの、等の特性を指摘している。

5 観点別評価と国語科研究室の「とまどい」

国語の授業において大きなウェイトを占めているのが、文学作品の鑑賞である。これには長い時間が配当され、たとえば1時間に一段落ずつ、少しずつ読み進めてゆくのが普通である。次の段落を読んで初めて物語の伏線が明らかになったりする場合があるので、1時間の授業の中で何かを習得し、次の応用段階に進んでいくという風に積み上げていく科目ではない。言い換えれば1時間の授業は自己完結しないということだ。ここに観点別評価を導入するにあたっての国語科スタッフのとまどいがあった。

特に疑問の声の多く挙がったのが何をもちて国語への「関心・意欲・態度」と評価するのかという問題だ。本校国語科ではこれを「この作家のほかの作品も読んでみたいと思う」ことや、「日常生活の中で自己表現の手段として詩やエッセーを書いてみる」ことのように、一連の授業が終わった段階で、生徒の主体的な活動によって更なる文学の享受や言語体験の深まりが期待できる状態を指す、と考えた。

従って、個々の授業の中で「生徒が何回手を挙げて発表したか」「ノートや辞書をきちんと用意しているか」「まじめにプリントを仕上げ提出したか」どうかをチェックすることは「関心・意欲・態度」の評価には当てはまらないという見解をまず初めに記しておく。

次に危惧の声が上がったのが、生徒に詩や俳句を創作させた場合、その作品を「評価」して点数化することなどできるのかということである。作品の良し悪しというものはあくまでも見る人の主観でしかない。主観的な評価を点数表記することによって、あたかも客観的な評価のように見せかけることは断じて慎むべきである、というのが本校国語科の共通認識である。

6 単元設定の理由

とはいえ、新指導要領では「伝え合う力」をキーワードに、「書く能力」を培うための指導をより一層計画的に行うよう求めている。そこで今回私は和歌の創作活動を取り上げた。もちろん新指導要領が施行される以前からの長きにわたり、俳句や和歌を創作する授業は小学校から高校まで、それぞれ全国津々浦々の教室で実施されてきたはずだ。しかしそれらの実践の多くは、主観性排除の見地から評価すべきものではないことを理由に、ともすると何も生徒に投げ返されないまま、作品を作らせっぱなしで放置されてきたのではなかったのか。

生徒の創作活動と評価との折り合いを付けることはできるのだろうか。生徒の創作の工夫に対して何らかが、どの生徒にも等しく投げ返される方法はないだろうか、と考え、私は「『伝え合う』和歌」～「相聞歌」の単元を組み立てることにした。

7 本単元における生徒の学習活動と「五観点」との関係

知識・理解

和歌を創作するには五・七・五・七・七の形式を理解した上で、自らの語彙力を駆使してことばを紡ぎ出さなければならない。これは「知識・理解」の領域に属する。ただしここで重要なのは、単にある知識を身につけているという知識の量を求めるのではないということだ。

ア) 辞書や資料を活用して新たな知識を獲得する技能を活用しているか。

イ) 適切な歌語を収集し、表現したい季節や情景に合わせてことばを取捨選択する活動を行っているか。

「知識・理解」とは常に他と関連づけられ、新たに再構築されるべきものであり、自在にインプット・アウトプットできる能力そのもののことを指すと考えられる。「何を知っているか」という「静」を見るのでなく、「既知の知識を活用して新たな知を獲得したか」という「動」を評価することが理想だということだ。

書く能力

本単元では架空の異性への「恋の歌」を創作するという課題を設定した。先に述べたように、「作品としての良し悪し」といった主観的な観点で指導、評価することはできないと考えるので、まず作品を書く上で「クリアしてもらいたい条件」を生徒に前もって提示した。

ア) (1)和歌を送り届けるべき相手は作者とどのような関係にあるのか。(2)情景(季節、時間、場所、場面)。(3)作者は相手に何を伝えようとしているのか。この3つの要素が第三者に読み取れる(想像しうるものである)こと。

イ) 相手を好きだと伝えたい場合、「好き」という言葉を使わずに間接的に表現すること。

アの条件は場面設定に矛盾がないか、筋道を立てて考えられたかどうかを判断基準に添削指導

を行った。この条件は「良し悪し」で評価しないために苦肉の策として加えた「言語項目でのハードル」である。直截的な表現をあえて禁止することにより、比喩など表現に工夫を凝らし、推敲を重ねるよう促すのが目的である。

生徒の事後アンケート回答例

- ・言葉を選び抜いて三十一文字にまとめられたときの喜びは大きかった。
- ・自分の気持ちを五七五七七で伝えるのは難しいと思いました。でもどうしたらうまく相手に伝わるかと考える楽しさも知りました。
- ・和歌を作る時は伝えたいことを短くしたり間接的にしたりするので、普段使わない所の脳を使った感じがした。
- ・大変だった。しかし和歌と触れ合うことで言葉の深さや、普段何気なく使っている助詞などの意味をより深く味わうことができたので楽しかった。

下書き用紙に記した歌語やメモはすべて消さずに残しておくことを指示したので、添削指導において授業者と生徒と一緒に思考の過程を読み返しながら、より効果的な歌語や表現の選択を手助けするのに役立った。始めから形式の整った作品ができてしまった生徒はそこで満足してしまい、よりよい表現を求めて推敲をする（一度できあがった作品を分解してしまう）ことを嫌って学習活動が停滞してしまう傾向が見られたが、本単元ではあくまでも初稿から完成作に至るまでに、十分に推敲の過程を経たかどうか、その学習活動の密度を「書く能力」の評価材料とした。

読む能力

本単元では大きく分けて2つの学習活動がこの領域に属する。

- ア)「伊勢物語(筒井筒)」本文の内容を理解することによって男女の贈答歌の内容を読み取り、なおかつ返歌を書く上でのテクニックを発見し、模倣すること。
- イ)クラスの作品一覧を読んでその情景を考え、返事を書きたい和歌を一首選ぶこと。

自分が和歌の創作で苦労しただけに、どの生徒もクラスの作品一覧を配布すると目の色を変えて隅から隅まで読み、どれが気に入ったか話し合ったり、作者は誰かなどと詮索したりして非常に強い関心を示した。

生徒の事後アンケート回答例

- ・そのまま「好き」と伝えるよりいろんな言葉に変えて作るということが難しかった。だから色々な人の和歌を読んで、こんなこと思うのか、こんな風に表現できるのかと驚きが沢山ありました。
- ・考えても考えてもうまく表現できなくて、本当に悩みっぱなしでした。でもそんな自分の和歌を「いい」と思ってくれる人がいたり、みんなの和歌を読んでどんな意味がこめられているのか考えたりすることができて、結構楽しむことができました。
- ・作るのはかなり難しかったけど、和歌の意味をどう感じ取るかが、読む人によってそれぞれ違うという部分がありけっこう面白かった。

生徒作品の相互評価において、表現が稚拙であるために本人が意図したのとは違う意味に解釈されてしまうケースや、反対に、何気なく使用した比喩表現が本人の予想以上の深まりをもってイメージされる場合もあった。作品を書くにとどまらず、それが他者にどのように読まれるかを目の当たりにすることは、生徒にとって新鮮に映ったようだ。「書くこと」とは「読ま

れること」と気付いた生徒には、この後の返歌創作において「言いたいことが相手にきちんと伝わっているか」他者の視点から表現を検証・吟味しようとする姿勢が生まれた。

優れた文章を読むことが、実際に自分で文章を書く時の素養となることは国語科の教員誰もが経験的に知悉していることであるから、読む活動と書く活動を有機的に結びつけてその力を伸ばすためには、小説を読む 感想文を書く、といった従来の活動形態だけでよとせず、今後様々なアイデアが実践されるべきである。

話す・聞く能力

本單元では

ア) 最も優れていると思う作品についてその評価理由を述べ、特に表現上の工夫に言及することができたか。

を評価規準とした。友人の述べる評価が生徒本人にどのような影響を与えたかは前の項で触れた。また單元では「話す・聞く」活動自体は評価の対象というよりも、友人の創作活動や和歌への関心を高めるのに機能したといえるので、授業者による「評価」とは別の、生徒間で交わされる無形の「評価」となったことを指摘するにとどめておく。

関心・意欲・態度

国語の授業において大きなウェートを占める文学鑑賞は、登場人物の心情を読み取ることが最終目標なのではなく、その中に時代や文化を超えた人間の普遍性を見いだすこと～自分の身に引きつけて考えてみる体験～にこそ意義がある。だから、国語における「関心・意欲・態度」とは学習活動に参加した結果、「生徒の主体的な活動によって更なる文学の享受や言語体験の深まりが期待できる状態」であるとの見解を示したのである。

つまり、「関心・意欲」があるから学ぶのだ、という捉え方は生徒の一側面に過ぎないのであって、学んだことによって自らの成長の軌跡を振り返ることができ、学んだ分野への関心が高まったり、さらなる学びへの意欲が喚起されるという捉え方も可能であろう。はじめに「関心・意欲」ありきとする先入観が、学ぶ前の状態や授業への参加態度をチェックしてポイント化するなどの混乱を教室に生じさせているのだ。この点には再度懸念を表しておきたい。

生徒の事後アンケート回答例

- ・最近メールばかりで思ったこと感じたことをキレイに文で表現することがないから新鮮だったんじゃないかな。内容が恋だから自分のことを見つめ直すいい機会だったと思う。
- ・すごく難しかった。言葉が出てこなくてすごい苦労した。もっとボキャブラリーを増やしてからやってみたい。
- ・返歌をすることが大変だった。相手の言いたいことを読み取って、相手の使った言葉を自分なりに再構築する作業は楽しかったけれど、思うように対話にならなくて苦労した。
- ・本当の自分と、和歌を作っている自分は別人だったから、自分を見直すチャンスだった。
- ・和歌を作ったことはあるけど、和歌で誰かに気持ちを伝えたのは初めてだったので難しかったです。でもそんな自分の和歌に返事を書いてくれた人がいて、すごくあったかい感じがしました。

本單元では学習活動に参加することによってどのような態度が醸成されたのか、振り返りの視点から「関心・意欲・態度」の評価を行った。評価材料は作品の制作過程を記録した下書き用紙、

添削指導における授業者との対話内容、事後の感想文、及び定期考査で、以下のような評価規準による。

- ア) 自分の気持ちを伝える和歌創作という目標を実現するために、語句の意味を調べたり、古歌の表現を参考にしたりする学習活動を自分で設定して行い、新たな知識を獲得したり達成感を味わったりすることができたか。
- イ) 古歌や友達の作品の表現の工夫や発想の豊かさを発見する「読む活動」を、自分の表現をより高めようとする「書く活動」に生かすという連続的な学びを体験することができたか。
- ウ) 誰かから返歌をもらったり、誰かの作品に返歌を返したりする活動に参加することによって、存在感や期待感を味わったり、個性を発揮する充実感を味わうことができたか。
- エ) 和歌の創作・贈答の活動を通して、古人がなぜこのような方法を使ったのか、自己の体験に基づいて考えたり、現代に生きる自分との共通点、相違点を考えることができたか。

本単元では、クラスの和歌一覧の中から好きな和歌を選んで返歌を書き、それをまた一覧にして最も贈答歌として優れている一組（二首）の和歌を選出するという活動が最後に置かれている。自分の提出した和歌に誰かから返事が来れば、誰もがこの単元の主人公になることができる。はじめに述べたように作品としての「良し悪し」を私個人の主観から点数化して評価に組み込むことは排除した。しかし本単元が従来の俳句・短歌創作の授業と異なるのは、その点を補うものとして友達からの共感の声や、表現上の工夫に対する賛辞が何よりの「評価」として生徒に達成感や充実感を与える役割を果たしていること、その「評価」はすべての生徒に等しく投げ返されること（外部団体への応募は、入賞したか、しなかったかという事実しか残さない）、また、誰かから返事が来るかもしれない、自分の返歌が友達の作品と結びあわされるかもしれないという期待感がより良い表現への工夫を生徒に促している点である。

8 まとめ

今回の評価規準作成を通じて感じたことは2点ある。

- ア) 5観点として挙げられた項目は、読む活動が書く活動に生かされたり、学習活動そのものが新たな関心や意欲を喚起したりするように、それぞれが有機的に結びついているものであるから、5観点をそれぞれを得点化して合算するという発想に捕らわれないよう注意すべきこと。今回生徒に友達の作品への評価理由を述べさせたことによって、個々の生徒に従来の点数化された評価とは別の「評価」が投げ返されたように、従来の点数や段階別表記によらない文章表記やその他の伝達方法との併用や使い分けを検討する余地があること。
- イ) 評価規準の作成とは、生徒への説明責任や業務の効率化を図る目的ではなく、授業者が自分の授業でどのような学習活動を設定し、生徒に何を身に付けさせようとしているか、その目的を明らかにし、内容を検討する鏡として教員自身に問いかけるものという捉え方をすれば、有用なものであるが、この視点を欠くと「授業態度のチェック」「主観的な判断の"客観的な"表記」などの誤謬を招く諸刃の剣であること。

この作業を通じて、学習活動の過程において生徒がどう変化していくことを自分が期待していたのかを振り返ることができた。ある単元に新学力観を当てはめた評価規準表を作成しようとする場合、無理に5観点到る学習活動を設定しようとする、却って達成目標が不明瞭な、散漫な授業になるおそれがある。しかしまた、発想を逆転させれば、評価規準表の作成を通して、知識量以外の多角的な視点から生徒の成長を発見できるような単元学習を独自に創造することもできよう。柔軟な発想から新たな授業形態が生まれる可能性に期待して、本稿を閉じたい。

【地歴公民】

第1学年（公民科・現代社会） 評価計画

担当 教諭

1 単元「よりよく生きることを求めて」(8時間)

2 学習指導要領の内容

人間尊重と科学的な探求の精神に基づいて、広い視野に立って、現代の社会と人間についての理解を深めさせ、自ら人間としての在り方生き方について考える力の基礎を養う。

3 4 観点の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
先哲の思想から人間の生き方について、自分の問題として主体的に考えようとする態度が見られる。	人間の生き方について、自分の生活や経験に照らし合わせながら、人としてよりよく生きるとはどのような生き方であるかを考える事ができる。	先哲の著書の中から要点を見つけ出す事ができる。また、与えられたテーマについてインターネットを使って効率よく調べる事ができる。	先哲の思想の概略を知識として理解している。

4 具体的な評価計画

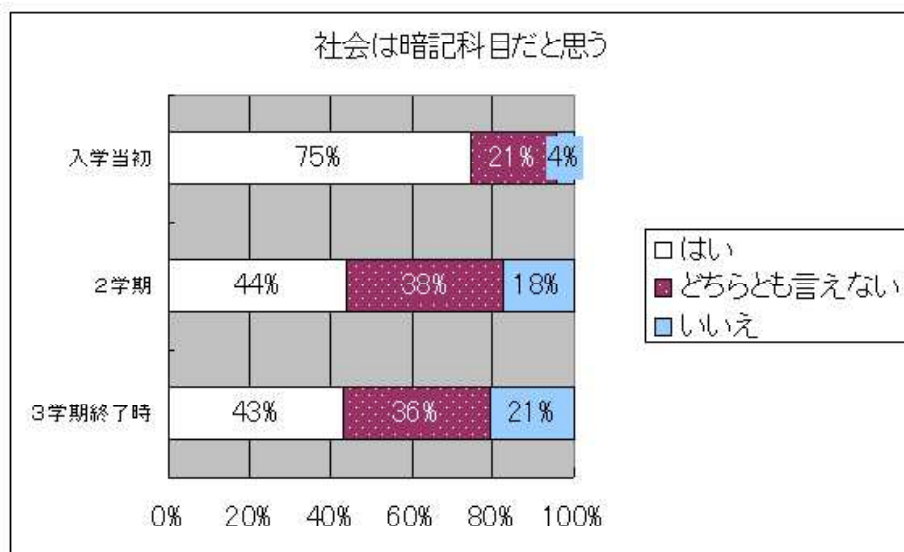
学習内容	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	判断基準（評価基準） A 十分満足できる B おおむね満足できる
パスカル・ソクラテス・プラトン・キリスト教・仏教思想の解説	それぞれの思想を理解している。（知識・理解）	考査	考査の中の配点で点数化
ベーコン・デカルトの思想の解説	それぞれの思想を理解している。（知識・理解）	考査	考査の中の配点で点数化
環境倫理についての解説	環境倫理の考え方を日常の具体的な場面を想定しながら説明でき、また、対応策を考える事ができる。（思考・判断）	考査	A 具体的で独自性のある対応策を考える事ができる B 対応策の内容がありきたりである
社会契約説とカントの「自律」についての解説	それぞれの思想を理解している。（知識・理解）	考査	考査の中の配点で点数化
先哲の思想のまとめと共感したものについて自分の考えを述べる。	今まで学習した思想をプリントでまとめ（知識・理解）、その中から共感できる思想について自分の経験をふまえ意見を述べ	プリント提出	A 体験をふまえながら自分の考えを書く事ができる。 B 自分の考えを書いているが、量が少ないか内容が薄い。

	る。(思考・判断)		
日本人のものの考え方を歴史的流れの中で解説	日本の思想の重層性を理解している。(知識・理解)	考査	考査の中の配点で点数化
儒教について課題をインターネットを使って調べる	儒教についてのテーマをインターネットを使用して時間内に調べることができる。(技能・表現)	プリント	1問3点×3問 点数化
「学問のすすめ」の要点を資料から読み取る	「学問のすすめ」の資料を読んで、その要点を見つけることができる(技能・表現)	プリント提出	正しいところに線を引く事ができれば加点

A 評価規準作成のポイント

従来の社会科の授業は、講義中心で知識を詰め込むことに重きが置かれていた印象がある。自分自身も授業はどうしても説明が中心になり、発問も生徒の知識を問うような発問がほとんどであった。そのような授業が行われた結果、社会に対する生徒の意識を調査すると、資料のように社会は暗記科目であると思うという回答が大半を占める結果となった。この調査は1年生に対して行った調査である。新しい学力観による授業や観点別評価が高等学校に比べて進んで実践されている中学校を卒業したばかりの生徒でさえこのような結果である。

現在、私が教えている生徒たちを見ていて思うことは、学習に対する興味関心がきわめて低いという点である。生徒にとって勉強とは、良い成績を取るために、嫌だけれどもやらなければならないことになっている。学問が本来持っている「知る喜び」や「知識への関心」が、学校教育の中では育成されていない印象を強く感じる。



それは、教員自身が知識重視の授業が行われた学生時代を過ごしてきており、授業とは知識を詰め込むものであるという、教員自身の固定観念に原因があるのではないだろうか。知識重視の教育はある意味では有効である。理系科目における論理的思考の育成や、マニュアルなどの与えられたものを読み取り理解する力の育成には、従来型の教育はとても有効であったと思う。

しかし、社会は変化している。そのような力が要求されたのは、日本が高度経済成長の中で先進国に追いつくことが、社会の要請であった時代のことなのではないか。今の日本の社会においては、その頃のようにマニュアルを理解する力が最も必要とされている力であるとは思えない。与えられたものに対応する力よりも、課題を見つけ、自分の頭で考え、解決していく力こそが現代の社会から学校教育に求められている課題なのではないだろうか。そのためには、学校教育にどのようなことが求められ、どのような授業を展開すれば、そのような生徒が育っていくかを、今までの固定観念から離れてもう一度考え直す時期に

来ているのではないかと思う。

社会科においても、従来の知識偏重の授業を行っていたのでは、社会の変化には対応できない。社会科こそ、その名の通り社会に最も敏感に対応し、社会に出て役に立てる人材の育成を目指すべき教科であると思う。だからこそ従来の授業を見直して、生徒が知識に対する興味関心を持てる授業、知識を暗記するだけでなく自分の頭で考え判断できる力を養える授業を目指していきたいと思う。

B 観点別評価について

社会科における観点別評価について、それぞれの観点をどのように考えたらよいか。

関心・意欲・態度

この点をどのように評価するのかについては、4観点の中では一番難しい点であると思う。小中学校では授業中に手を挙げた回数や発表の回数で生徒の意欲を測るという試みも行われていると聞かすが、それは本当の意味の意欲の評価にはならないと思う。手を挙げたり、発表をするというのは、生徒の性格にもよるところも多く、授業中におとなしくしているからといって意欲がないと判断するのはどうであろうか。かといって、他の客観的な材料で点数化するのは難しい。

私はこの点について、まずは授業に取り組む姿勢を判断材料とした。具体的には、始業時に授業の準備ができていないか、授業中に寝ていたり他のことをしていないかなどをチェックして、それができていない生徒にマイナスの評価をすることとした。

次に、生徒のノートから意欲を判断した。板書をただ写すだけではなく、そこに授業中の口頭の説明をメモしたり、自分なりの工夫が見られるものを評価の対象とした。

プリント学習をした際には、プリントの中に生徒が自分で考えて答えられる簡単な課題を載せておき、それを宿題にしてやってあるかどうかを評価材料とした。

また、あらかじめ範囲を予告しておいて行う小テストの結果も、「意欲」と見なしてもかまわないのではないだろうか。範囲が決められていて、そこを勉強さえしていればできる問題を作成する。それを事前に勉強しておくということは意欲の表れと見なしてもかまわないと考える。

思考・判断

思考判断については、現代社会の場合、評価はしやすい観点である。一番簡単な方法はあるテーマを与えて、それについての考えを書かせるものである。しかし、その際難しいのは「評価基準」すなわち、ABC評価をする場合、何を基準としてABCとするかを客観的にすることである。それは自分自身の評価の公正さのみならず、生徒にしてみても、「なぜ自分がこの評価なのか」を納得させることが、その後の思考判断力の向上につながる。

あるテーマについて、自分の考えを書くということに、慣れていない生徒も多く、初めのうちは難しく感じるようである。しかし、回数を重ねていくうちに、文章を書くことにも慣れていき、また、評価の際に文章の構成や、考えの独自性に重点を置いていくと、1年の間に生徒の文章力や課題を考える力が身に付いていくのははっきりとわかる。この点については、観点別評価を意識した授業を行って、手応えを感じた点であった。

思考・判断という観点はこれから生徒が社会に出て行く中で重要な観点であると思う。現在の生徒は指示をされたことはそつなくこなすが、自分の頭で考え、状況に応じた判断をすることが苦手であるように感じる。それは、大人たちが子どもにいろいろな場面で手をかけすぎてきている社会の風潮にあると思う。何をするにもある程度の下準備や手がかりが与えられていて、その与えられた状況の中でマニュアル通りに上手にことを進めていくのは得意なのである。自分の頭で考え判断するという生徒にとって苦手な分野を授業の中で育成していくことができればと考える。

技能・表現

現代社会における技能・表現とはどのような点を指すのであろうか。今回の単元では、技能とはレポートを作成する際の資料を収集する力やパソコンを使うこと、表現とはそのレポートの出来具合で判断した。また、資料を提示してそこから判断する試験問題を作成した。それが技能・表現を言えるのかは自分でも自信がない。少なくともパソコンを使う技能は、教科「現代社会」の目標に照らし合わせた評価とは言えない。しかし、この観点の評価場面を見つけることが私にとっては難しかった。

前項の思考判断のところでも述べた自分の意見を書かせる作業も、考えるところまでは思考だが、それを文章に表す部分は表現として評価することもできる。そもそも、4観点は厳密に分類できるものではないので、無理に4観点に当てはめようとする必要もない。

知識・理解

この観点は現代社会に限らず、従来の学校教育の評価の中心となっていた観点である。授業で教えた内容を試験で出し、どれだけ覚えているかで点数がつけられ、それが評価となる。「知識の量」「授業の理解」といえば聞こえはよいが、特に社会の場合は試験で点数をとるためには、用語を暗記することが試験勉強となる。知識・理解を問うといいながら、個々の生徒の記憶力とどれだけ暗記するのに時間をかけたかを評価しているにすぎないのではないか。

その証拠に、試験が終わってしまうとその範囲の知識はすぐに忘れ去られてしまうというケースが多く見られる。試験のためだけに一時的に暗記はするが、試験が終わると、すぐにその知識は消えてしまう。そのような状態で本当に生徒が知識を身につけたと言えるのであろうか。

結局のところ、知識・理解を問うということは教師にとって一番楽な評価の方法なのではないか。試験の問題を作成するにあたって、そのような問題は作成も採点も楽である。楽な方法だからこそ、今まで学校教育の現場で知識理解が評価の中心になってきたのだと思う。

一時的な暗記力ではない、本当の意味の知識・理解を評価するというのは実はたいへん難しいことなのかもしれない。しかし、自分自身そこまで突き詰めた評価ができていくかということ、やはり、一時的な記憶力を問う問題から脱却できていないのが現状である。

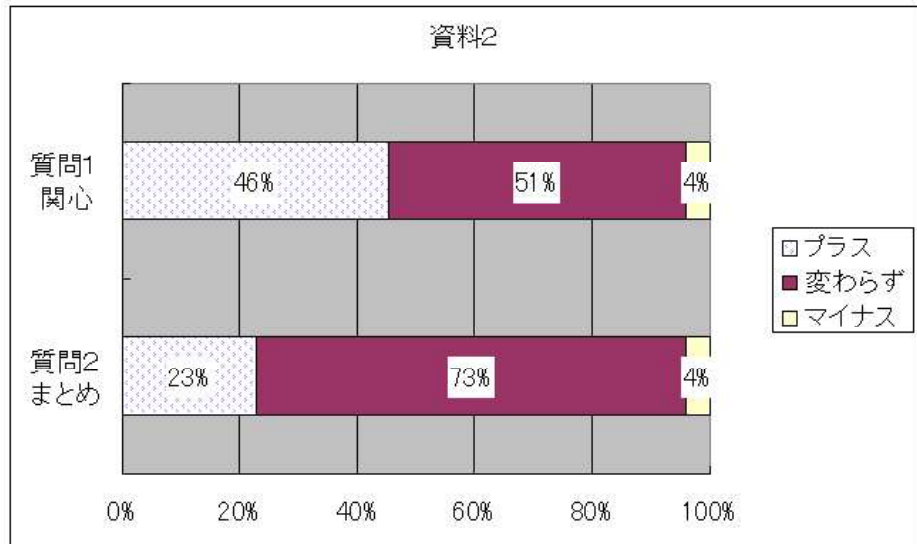
C 観点別評価による生徒の変化

この点については、資料1に見られるように、社会を暗記科目と思う生徒が減ったことが第一にあげられる。この点は私が現代社会の授業を行っていく上で一番意識して行った点である。その割には1年間の授業が終わっても43%もの生徒が、社会を暗記科目と思っているのは、自分の力不足を痛感する数字である。

その原因を自己分析すると、授業そのものや試験以外での評価場面（自分の意見を書くことやレポート作成など）においては、社会は単なる暗記科目ではないということが生徒にはある程度伝わったと思う。

しかし、結局のところ定期考査において、暗記をしなければ点数がとれないという現実があり、いくら思考判断を意識した授業を行っても、結局試験では暗記科目であるということに戻ってしまう。そのことが生徒の意識から「社会は暗記科目である」という概念を取り除けない原因ではないかと推測する。

次に、右のグラフは1年生2クラスで1年間の授業が終わった後に、採ったアンケートの結果である。質問1は「社会の出来事やニュースに関心がある」、質問2は「自分の考えを文章にまとめることができる」という質問である。それぞれ授業前と授業後と比較しての変化を集計した。



観点別評価を意識した授業を行った結果、社会への

関心は半数近くの生徒がプラスの変化があったと答えている。一方で考えをまとめるという点に関しては、大半の生徒は変わらずという結果であった。質問1は4観点のうちの「関心・意欲・態度」に関するもので、質問2は「思考・判断」と「技能・表現」に関するものである。どちらの項目もプラスに変わった生徒が半数に達していないということは、授業に対して生徒の変化が期待していたほどは変わらなかったということであり、さらなる授業の工夫や評価方法の工夫が必要であることを痛感した。

特に自分の意見を書くことに関しては苦手な生徒が多く、自由記述を見ても「自分の意見を思うように表現できなかった」という意見が多かった。自分の考えが持てても、それを文章として表現するのが苦手な生徒が多いように感じられる。これは暗記中心の教育を受けてきた弊害の一つの表れであると思う。自らが考え判断する能力の欠如がここにも現れている。やはり、この部分をもっと意識した教育が行われるべきであると思う。

D まとめ

社会科の場合、科目の多様性により、科目によって観点別評価のやり方も大きく異なると思う。現代社会の場合、わりと知識理解に偏らない評価が行いやすい科目であると思う。しかし、歴史系の科目などはどうしても知識の詰め込みに陥りやすいのではないかと。歴史を教える中で、思考判断や技能表現を評価するのは工夫が必要になる。

また、歴史科目の場合時間の制約の問題もあると思う。思考判断や技能表現を意識した評価や授業を行うのは時間をかける作業になりやすい。たとえば授業中に自分の考えを書かせるだけでも、最低でも15分、慣れないうちは20分以上かかる。その分授業の進行が遅くなり、ただでさえ時間が足りなくなりがちな歴史科目では、そのような点が課題としてあげられる。

そのような中で、やはり社会の観点別評価を行うときに、一番効率よく理想的なのは4観点をふまえた試験問題の作成なのではないだろうか。試験問題の見直しこそ、社会の観点別評価を行う際に検討すべき課題であると思う。

次の問題は世界史の考查問題である。

次の写真はエジプトのピラミッドである。初期の頃はAの写真のような形のものが作られていたが、後にBのような形に変わっていった。その理由を考えて答えなさい。

(ヒント：Bの形の方が美しいと考えられていた)

A



B



この問題は、授業中には説明をしていない。生徒がその場で考えて答える問題である。もちろん正解はあるのだが、正解以外の答でも、知識として誤っていないものには点数を与えた。これは思考力を問う問題として出題した。思考力を問う問題というのは、試験に関していえば、生徒が事前に勉強をしていなくてもその場で考えられる問題である。同じ問題でもその答を授業中に言ってしまうと、それは思考力ではなく知識の問題になってしまうのである。

この問題に関しては、他の暗記問題はよく覚えているが、この問題についてはまったく書けないという生徒も見られる。また逆に、暗記問題はできなくてもこの問題については答を書ける生徒も見られる。知識理解力と思考判断力は必ずしも一致しないことが、この問題の生徒の解答を見るとわかる。

従来学校教育の中で行われてきた知識、理解力を重視した試験問題や、授業内容から教員自身が発想を変えて、多面的な教育、評価方法を考えていくべき時代になってきているのではないだろうか。社会が学校教育に求めているものはそのようなものであり、また、生徒にとっての社会の中で「生きる力」を身につけさせることは、社会科の教員として必要なことであると思う。

【数学】

第1学年 数学 評価計画

担当 教諭

- 1 単元 「二次関数とそのグラフ」(7時間)
- 2 学習指導要領の内容(二次関数)

二次関数について理解し、関数を用いて数量の変化を表現することの有用性を認識するとともに、それを具体的な事象の考察や二次不等式を解くことなどに活用できるようにする。

3 4 観点の評価基準

関心・意欲・態度	見方・考え方	表現・処理	知識・理解
関数の値を座標に書いて、グラフを描き、二次関数のグラフを身に付けようとする。	頂点と概形がわかれば、容易にグラフが描けることに気づくことができる。	頂点、軸、概形などをもとに自由にグラフを描くことができ、種々の問題を解いている。	関数の式とグラフの関係を理解し、それらの知識を身に付けている。

4 具体的な評価計画

学習内容	学習活動における具体的な評価基準	評価資料	判断基準（評価基準） A：だいたいできる C：あまりできない
y=ax のグラフ	関数の値を座標に書いて、グラフを描こうとする。 （関心・意欲・態度）	プリント 自己評価表	A：だいたいできている C：空白が多い 自己評価による申告
	基本的な2次関数のグラフを描くことができ、軸、頂点を求めることができる。（表現・処理）	プリント 自己評価表	A：だいたいできている C：空白が多い 自己評価による申告
	中学で学んだ基本的な二次関数のグラフ、軸、頂点、概形を理解している。（知識・理解）	自己評価表	自己評価による申告
y=a(x-p) のグラフ	関数の値を座標に書いて、グラフを描こうとする。 （関心・意欲・態度）	プリント 自己評価表	A：だいたいできている C：空白が多い 自己評価による申告
	頂点と概形がわかれば、グラフが容易にかけることにきづく。 （見方・考え方）	自己評価表	自己評価による申告
	上下に平行移動した2次関数のグラフを描くことができる。 （表現・処理）	プリント テスト	A：だいたいできている C：空白が多い テストで正解・不正解
	関数の式とグラフの関係を理解する。（知識・理解）	テスト	テストで正解・不正解
y=ax + q のグラフ	関数の値を座標に書いて、グラフを描こうとする。 （関心・意欲・態度）	プリント 自己評価表	A：だいたいできている C：空白が多い 自己評価による申告
	頂点と概形がわかれば、グラフが容易にかけることにきづく。 （見方・考え方）	自己評価表	自己評価による申告
	左右に平行移動した2次関数のグラフを描くことができる。 （表現・処理）	プリント 自己評価表 テスト	A：だいたいできている C：空白が多い 自己評価による申告 テストで正解・不正解
	関数の式とグラフの関係を理解する。（知識・理解）	テスト	テストで正解・不正解
y=a(x-p) + q のグラフ	頂点とy軸の交点を求め、グラフを描こうとする。 （関心・意欲・態度）	プリント 自己評価表	A：だいたいできている C：空白が多い 自己評価による申告
	上下左右に平行移動した2次関数のグラフを描くことができる。 （表現・処理）	プリント 自己評価表 テスト	A：だいたいできている C：空白が多い 自己評価による申告

			テストで正解・不正解
	関数の式とグラフの関係を理解する。(知識・理解)	テスト	テストで正解・不正解
y=ax ² +bx+c のグラフ	一般形の2次関数を上下左右に平行移動した形に変形しようとする(関心・意欲・態度)	プリント 自己評価表	A : だいたいできている C : 空白が多い 自己評価による申告
	式の形を変えるとグラフが描きやすいことに気づく(見方・考え方)	自己評価表	自己評価による申告
	式の形を変えることができ、グラフを描くことができる。(表現・処理)	テスト	テストで正解・不正解
	式の形を変える方法を理解する。(知識・理解)	テスト	テストで正解・不正解
グラフの移動	グラフの平行移動及び対称移動と関数の式との関係を理解する。(知識・理解)	テスト	テストで正解・不正解
関数の決定	グラフの条件から式を作り、解いて、2次関数の式を決定することができる。(表現・処理)(知識・理解)	テスト	式を作ることができる(知識・理解) 解くことができる(表現・処理)

A 評価基準作成のポイント

評価には、「**相対評価**」・「**絶対評価**」があり、俗に「**相対評価**」と言われると、5段階でAが上位20%、Bが次の上位30%などの基準を定め評価する方法と思われがちであるが、実際は集団のなかで一人の生徒を評価するとき他の生徒と比べることが**相対評価**ではないだろうか。そう考えると高校は「**絶対評価**」と言われているが平均点を60点ぐらいという制約は「**相対評価**」の要素を含んでいるのではないだろうかと疑問をもつことがある。しかし、授業の到達度を測るためのテストを作成するとき平均60点ぐらいを目標に作成し、50点から70点の結果になることは「**当該校**における**絶対評価**」の基準がっているとと思う。

そのためには、日頃の授業において、生徒個々の到達度を十分に把握する必要がある。さらに、生徒個々の伸長を図るためには次に挙げる観点別評価が重要になってくる。

そこで、一例ではあるが日頃の授業で実践していることを紹介すると、毎授業の終わり約5分間を利用してチェックシート(自己評価表)という用紙に、本時の授業内容、確認問題、自己評価、質問等を書かせ、単元終了時にアンケート形式 × で自己申告の理解度や取組度を書かせている。このチェックシートを用いるなかで、確認問題では、解答の内容で「見方・考え方」「表現・処理」「知識・理解」などを日々評価することができ、次の授業展開に役立てることができる。また、自己評価や申告をする「**個人内評価**」を導入することで偏った評価を避けることができたり、生徒個々の状態を把握することができる。

現在も変化(改善)しながら行っているが、もう始めて20年近くなる。二度くらい研究発表させていただいたが、特別な意識で行っているわけではなく、どうすれば生徒はわかるようになるのか、充実して授業に取り組めるのかを考え実践して、「**わかりやすい授業**」と「**やればできるという実感**」を生徒に与えてやりたいと思い、当該校に合わせながら工夫して授業を行っているに過ぎない。

B 観点別評価について

観点別評価は定期考査に偏りがちな評価を指導（授業）の中で行われる評価に重点をおこうとするもので、現在行われている観点ごとに分けずに一括して評価する方法を否定しているものではないと思う。

評価活動は学習目標の達成度をより確かに評価するために、次の3点に注意しなければいけないと思う。

指導に活かされなければならないこと（評価と指導の一体化）

指導に活かすためには、年度ごとや学期ごとや定期考査ごとでは、あまりにも間隔が広すぎて良くない。やはり、日々の授業ごとに改善されていかなければならない。相当な時間をかけて作成した指導計画や評価計画が実際に指導してみると実態にそぐわないことも多々見られる。そこで、今まで体感で判断して改善していたことを、これからは記録に残し、全体授業の中で個々の生徒の伸長を図れるよう教育活動をしていくことが大切である。

多角的に行われていること（観点別評価）

多角的に評価することにより、生徒個々の課題点がより明確になるので必要だと思う。ただ、必ずしも4つの観点に分ける必要はないと思う。

例えば、恥ずかしいことであるが、今回の研究であまりにも4つの観点を意識しすぎて、当初、特に「関心・意欲・態度」を評価するにあたりチェックマン化してしまった自分がおり、疑問を感じ約1ヶ月で止めてしまった。

指導要領の4つの観点到準しながら、各学校・各教科及び各科目の担当者が、多角的に評価するように目標を各領域（観点）に分けて、その達成度を評価するようになればよいと思う。

妥当性・信頼性のある評価

定期考査等のテストによる評価は、妥当性・信頼性があり、客観性もある評価の一つである。それ以外の指導（授業）の中で行われる評価を、妥当性・信頼性があるものにするには、日々の客観的データの蓄積が必要不可欠だと思う。

C 観点別評価から評定へ

本来、観点別評価による生徒の変化をまとめるのだが、普通の授業を大きく変更したわけではなく、日々の指導に観点別評価を導入してみただけで、それを元に生徒に還元したものと、今までの方法で生徒への還元したものと差がないので比べようがない。

観点別評価による生徒の変化は、観点別評価をすることによって、生徒個々の課題を明確にし、個々の生徒に還元した結果、生徒がどのように変化したかなので、残念ながら調査をまとめることができなかった。そこで、観点別評価から評定へどのように行えばよいのかまとめることにした。

観点別評価には2つの側面があると思う。1つは領域（観点）に分けて評価し生徒個人の課題をみつける面、もう一つは定期テストの偏らない普通の授業（指導）のなかで領域（観点）に分けての評価である。同じようなことだが、過程と結果の違いである。過程を評価することは大切であるが結果も大事である。また、良い結果を生むには過程が大事である。

そこで、結果を考査点、経過を平常点とすると比率をどのようにすれば良いのだろうか。現在校は考査点を70%、平常点を30%とし、総計で30%を満たない生徒の評定を1としている。

私は、平常点30%の部分を日頃の授業で行った確認テストや提出物等で主に評価をし、自己評価表はコミュニケーション活動した（生徒への還元）のために利用している。もちろん、比率はかなり少ないが自己評価表も客観性に影響のない範囲で取り入れている。

D まとめ

まず、4観点をもとに本校独自の数学教育の観点を作り、以下の点に注意して指導及び評価計画を作成する必要がある。

日頃の指導（授業）で、生徒の伸長を手助けできるような指導のための評価になるようにする

欲張りすぎず、焦点がボケないように指導と評価のねらいを明確にする
誰が評価しても評価の幅が最小限になるように評価基準を明確にする
簡単に長続きするような評価方法にする

次に、定期考査の観点別化が必要である。やはり、定期考査等のテストによる評価は、妥当性・信頼性があり、客観性もある評価なので大事である。ただ、観点別に整理して出題し、返却時に観点別到達度を生徒に知らせる必要があると思う。そして、データを蓄積し処理を行い指導に活かしていくことが大切である。

さらに、経過を重視するためにも日々の授業または単元ごとにでも、確認テストや提出物等で観点別評価をし、生徒への還元していくことが必要である。

【理科】

観点別評価に向けての取り組み（理科 - 化学）

はじめに

小・中学校においては、すでに絶対評価および観点別評価が行われている。それに対して高等学校においては、一部の学校においてのみ観点別評価が導入されているのが現状である。観点別評価は、定期テストでははかれない関心や意欲などについても評価を行うことになる。

これに対して、難易度の異なる問題でテストを行い、生徒の点数分布を作るのがこれまで行われてきた相対評価であろう。私個人の経験でも、これまでは相対評価の考え方で評価を行ってきたといえる。ただし、理科という教科の特性上、実験に参加し、実験レポートの提出を行うことでテストでははかることが難しい技能や関心・意欲・態度などを評価に取り入れることは、以前から行われてきたといえるだろう。

そこで、今回、4つの観点を明確にして授業を展開し、それぞれの観点別に評価を行う試みを行ったので報告する。

使用教材 実教出版 化学 毎時間プリントを作成
大単元 物質の変化
小単元 酸化還元反応
時数 11時間

限目	授業内容	プリント	目標
1	酸化と還元		酸化と還元の意味を理解すること
2	酸化数		酸化数の求め方、酸化数の増減と酸化還元の関係を知る
3	酸化剤と還元剤		酸化還元反応を酸化剤と還元剤の反応として理解する
4	実験 銅を作る		酸化銅()から金属銅をつくる
5	酸化還元反応の量的関係		酸化剤と還元剤の反応を組み合わせることで反応式を作り、それを使って量的な計算ができるようにする
6	実験 金属のイオン化傾向		亜鉛、銅、銀のイオン化傾向を比較する
7	金属のイオン化傾向その2		イオン化列を知り活用する 金属と水や酸との反応を知る
8	電池のしくみ		ダニエル電池及び鉛蓄電池の構造と仕組みを理解する
9	実験 ダニエル電池		ダニエル電池を組み立て、電圧を測定する
10	電気分解		電気分解の仕組みを理解し、どんな物質ができるか知る
11	電気分解の法則		電気量の計算ができ、電気分解に応用する

観点別評価の方法

観点とは、(1) 関心・意欲・態度、(2) 思考・判断、(3) 技能・表現、(4) 知識・理解の四つの観点とした。それぞれの観点ごとにおおよそ25点を分配することとし、詳細は別表の通りとした。

観点	評価資料	評価規準
関心・意欲 ・態度 満点：24点	授業時の質疑 (5回実施)	発問に対して関心を持って解答する：3点 発問に対して他人任せである：0点
	実験時の態度 (3回実施)	意欲的に実験に取り組んでいる：3点 他人任せである：0点
思考・判断 満点26点	プリント	設問が正しく解答されている：3点 不十分である：1～2点 解答していない：0点
	プリント	設問が正しく解答されている：3点 不十分である：1～2点 解答していない：0点
	期末考査[3]3)	設問が正しく解答されている：5点 不十分である：1～4点 解答していない：0点
	期末考査[3]4)	設問が正しく解答されている：5点 不十分である：1～4点 解答していない：0点
	期末考査[5]4)	設問が正しく解答されている：5点 不十分である：1～4点 解答していない：0点
	期末考査[5]7)	設問が正しく解答されている：5点 不十分である：1～4点 解答していない：0点
技能・表現 満点22点	プリント、	結果が見やすくまとめられている：各4点 普通である：2点 他人任せである：0点
	の実験	実験装置が正しく組み立てられ、安全に行われている：5点 安全に対して注意がなされていない：0点
	の実験	電池が正しく組み立てられ、電圧を正確に測定している：5点 電池がうまく組み立てられない：0点
	期末考査[1] [2] [3]1)	各設問のすべてに1点を配点して酸化還元反応についての知識や理解度をはかるものとする。

知識・理解	[3] 2)
	[4]
	[5] 1)
	[5] 2)
	[5] 3)
	[5] 5)
	[5] 6)
	[6]
満点：28点	

各観点別評価におけるまとめと問題点

関心・意欲・態度について

この観点においては、授業時の発問と実験時の態度で評価した。発問に関しては、問題の難易度に注意する必要がある。また、意欲的に答えても誤っている場合など、判断が難しい場合もある。実験時の態度は、比較的チェックしやすいが、50分（実質35分くらい）の間に行わなければならない。

思考・判断

この観点では、プリント及び考査での評価とした。酸化還元反応の内容の中で、計算を伴うような問題で思考力を試した。結果は、ほかの観点と比較して評価の差が一番はっきりと出た。

技能・表現

実験時のレポート提出および、実験での技能をはかった。実験は4人の班ごとに実施しているためレポートについては、4人がほぼ同じ評価になった。また、技能面でもリーダーがしっかりしている班の評価が高くなった。この観点においては、個人の評価を付けるには工夫が必要である。

知識・理解

この観点は、今までの定期テストの中でも同様にはかることができる。ただし、知識理解の配点が25点にするかどうかは考え直す必要があるかもしれない。

アンケートの実施

観点別評価の導入について、評価を受ける側の生徒の意識を調べるためアンケートを実施したので報告する。 アンケート回収数91

Q1. あなたは実験への参加態度などをもっと評価に入れてほしいと思いますか？

もっと評価してほしい・・・46（51%）

そうは思わない・・・42（46%）

無回答・・・3（3%）

Q2. あなたは、化学の課題（調べ物などの宿題）を出して、それを評価に入れてほしいと思いますか？

そう思う・・・32（35%）

思わない・・・58（64%）

無回答・・・1（1%）

Q3. 化学の成績（通知票）が、考査8割、プリントの提出および平常点2割（現状）という付け方でいいと思いますか？

現状でいい・・・54（59%）

変えた方がよい・・・・・・・・・・ 36 (40%)

無回答・・・・・・・・・・ 1 (1%)

Q4 例えば、次のような評価方法をどのように思いますか？

化学についての知識や理解度 25点

実験の技術や発表の方法 25点

化学における思考力 25点

化学の学習に対する意欲・態度 25点

賛成である・・・・・・・・・・ 23 (25%)

どちらかという賛成である・・ 43 (47%)

どちらかという反対である・・ 16 (18%)

反対である・・・・・・・・・・ 1 (1%)

無回答・・・・・・・・・・ 8 (9%)

アンケートの結果のまとめ

このアンケートは、観点別評価に移行するにあたって生徒側の意識はどうかを知るために行った。Q1とQ2は、それぞれ関心や意欲を評価するための材料になるものについて問うた。この観点について、今後、きちんと評価していく必要があると思う。

Q3については、これまでの評価方法についての生徒の意識を調べたもので、40%もの生徒が現状には満足していない様子が見られた。

Q4については、Q3とも関連する質問であるが、実に7割以上の生徒が、観点別に評価することを望んでいるという結果であった。これまで行ってきた相対評価の方法では、生徒の学力をどちらかという受験に対する学力と考えて行ってきたが、より分析的に評価していく必要性を感じた。



【保健体育】

第2学年（保健・体育）評価計画

担当 教諭

1 単元「バレーボール」(10時間)

2 学習指導要領の内容(球技)

(1) チームの課題や自己の能力に応じて運動の技能を高め、作戦を生かした攻防を展開してゲームができるようにする。

(2) チームにおける自己の役割を自覚して、その責任を果たし、互いに協力して練習やゲームができるようにするとともに、勝敗に対して公正な態度がとれるようにする。また、練習場などの安全を確かめ、健康・安全に留意して練習やゲームができるようにする。

(3) チームの課題や自己の能力に応じた課題の解決を目指して、計画的な練習の仕方やゲームの仕方を工夫することができるようにする。また、競技会の企画や運営ができるようにする。

3 4観点の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
バレーボールの特性に関心を持ち、楽しさや喜びを味わえるようチームにおける自分の役割を自覚して、その責任を果たし、互いに協力して進んで練習やゲームに取り組もうとするとともに、勝敗に対して公正な態度をとろうとする。また、練習場などの安全を確かめ、健康・安全に留意して練習やゲームをしようとする。	チームや自分の能力に応じた課題を設定し、その解決を目指して、練習の仕方やゲームの仕方を工夫している。	チームの課題や自分の能力に応じて、運動の特性に応じた技能を身に付け、作戦を生かした攻防を展開してゲームができる。	運動の特性に応じた、技術の構造や技能を高めるための効果的な練習の仕方、ルール、審判法を理解し、知識を身に付けている。

4 具体的な評価計画

学習内容	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	判断基準(評価基準)
1時間目 ・アンダーハンドパス練習	・リーグ戦を見据えたチーム分けをし、協力して準備をしたり、練習をしようとする。 (関心・意欲・態度)	観察 カード	B おおむね満足できる
	・ボールの落下点に素早く入り、腰を低くして構え、足首・膝・腰のバネでボールをコントロールできる。 (運動の技能)	テスト	B: 肘を十分に伸ばして、直上トスを10本続けることができる。
2時間目 ・オーバーハンド	・自分の能力に応じた課題設定や練習方法を、選んだり見つ	観察	B: 自分の課題を解決する為の、適切な練習方法を見つけようとしている。

<p>パス練習</p>	<p>けたりしている。 (思考・判断) ・ ボールの落下点に素早く入り、“三角の窓”からボールを見て、肘や膝のバネでボールをコントロールできる。 (運動の技能)</p>	<p>カード テスト</p>	<p>B：肘を柔らかく使い、直上トスを10本続けることができる。</p>
<p>3時間目 ・ サービス練習</p>	<p>・ 練習場所の安全を確かめ、安全な方法で練習を行い、怪我に対する留意ができています。 (関心・意欲・態度) ・ 腕の振りや手首の使い方を工夫して、ボールに回転を与え、いろいろな球質のサービスをコントロール良く打てる。 (運動の技能)</p>	<p>観察 カード テスト</p>	<p>B：周囲の安全確認と危険予告をしながら練習を行い、怪我の防止に留意している。 B：コントロール主体で、オーバーハンドサービスまたはフローターサービスが打てる。</p>
<p>4時間目 ・ トス練習</p>	<p>・ 自分の能力に応じた課題設定や練習方法を、選んだり見つけたりしている。 (思考・判断) ・ 膝と手首のスナップを十分に効かせて、攻撃の目的に合わせた、いろいろなトスを上げることができる。 (運動の技能)</p>	<p>観察 カード テスト</p>	<p>B：自分の課題を解決する為の、適切な練習方法を見つけようとしている。 B：パス方向へステップを踏み、直上またはオープントスを上げることができる。</p>
<p>5～6時間目 ・ スパイク練習</p>	<p>・ 練習場所の安全を確かめ、安全な方法で練習を行い、怪我に対する注意ができています。 (関心・意欲・態度) ・ タイミング良くジャンプをして、最高点でボールをとらえ、ねらったコースにスパイクを打つことができる。 (運動の技術)</p>	<p>観察 カード テスト</p>	<p>B：周囲の安全確認と危険予告をしながら練習を行い、怪我の防止に留意している。 B：タイミング良くジャンプをして、相手コートにスパイクを打つことができる。</p>
<p>7～10時間目 ・ ゲーム形式 ・ リーグ戦</p>	<p>・ チームや自分の課題の達成状況をとらえ、練習やゲームの仕方を見直したり、新たな課題を選んだりしている。 (思考・判断) ・ ルールや審判法を理解して、ゲームをスムーズに進行させることができる。 (知識・理解) ・ 身に付けた個人的技能や集</p>	<p>観察 カード 観察 カード 観察</p>	<p>B：技能の段階に応じて、相手との攻防に合った作戦を立てている。 B：ルールを理解し、マナー良くゲームを進めようとしている。 B：能力や課題に応じて身に付けた技</p>

	团的技能を更に高めたり、新たな技能で攻防を展開することができる。 (運動の技能)	カ ー ド	能を生かして、ゲームに参加することができる。
--	---	-------------	------------------------

A 評価規準作成のポイント

体育科の授業は、従来から参加態度にも重点を置いており、到達目標に向けた練習状況及びスキルテストに加え、集合状況や活動レポートの提出、準備・片付けなどへの協力状況も、生徒がどのような気持ちで授業に取り組んでいるのかを見る評価の材料としてきた。ただし、その配点については漠然としたものがあり、実技点の占める割合が高かったため、参加態度の状況によっては実技点からも減点をして、全体の調整を行っていた現状はある。今回のこの評価についての見直しは、体育科にとっては、観点別の配点の再考であるとともに、生徒が意欲的に授業に取り組む為の良い意識づけにすることを目標としている。

B 観点別評価について

関心・意欲・態度

授業への参加にあたり、集団行動としての全体への配慮と、活動中における個人の身体への配慮について、どれだけ高い意識をもって参加できているかを評価した。

思考・判断

種目別に、その動作のポイントを体得するために行った工夫や、良い手本を仲間の中に見つける意識、また、ゲーム中における戦術に関する工夫などを評価した。

技能・表現

事前に設定した課題による、基本技能を見るスキルテストの他に、ゲーム中における応用力や、チームにおける貢献度などを、総合的に評価した。

知識・理解

ゲームの進行に必要なルールの学習に加え、練習およびゲームを円滑に行うための、種目に応じたマナーについても理解させ、その実践状況を評価した。

C 観点別評価による生徒の変化

生徒に対する評価についての説明で、実技テスト点は50%であることを明言したため、その他の活動状況の評価が占める割合が、著しく高くなったという印象を強く植え付けることができたと思う。体育科としては以前から、「一生懸命に取り組む姿はあるが、実技点がどうしてもとれない」という生徒への救済処置をさりげなく、また、「実技点は素晴らしいが、普段の授業への参加態度が悪い」生徒への戒めははっきりと調整を行ってきており、生徒を評価する感覚という面で大きな変化はないが、生徒に対する意識付けという面での効果は大いにあったように思われる。

D まとめ

体育の目標は、様々な種目を通して、体を精一杯に動かすことが好きになり、生涯を通じて運動に親しむ習慣を身につけさせることである。上手にできるかできないかを評価することで、やる気を起こす生徒もいれば、努力する姿勢を評価してあげることで、更にやる気を起こす生徒もいる。どれだけ誠実に取り組んでいるかを見るために、レポート等も活用するが、内面を覗ききることはなかなか難しい。だから、できたかどうかの結果に偏りがちだが、体で覚えることが、そんなに簡単ではないことも知っている。観点別の内訳を明確にした狭い配点の中では、様々なタイプの生徒に対して、これまで培ってきたこちらの感性を生かし、融通の利く評価がしにくくなったという実感もあるが、評価の説明責任というものに対する意識は確かに高まった。

【芸術】(書道)

第1学年 (教科：芸術科・科目：書道) 評価計画

担当 教諭

1 単元「自運 漢字仮名交じりの書(半紙大)」(8時間)

語句の補足説明

臨書...中国や日本の名跡や名筆をよく観察しながら毛筆で書く訓練をし、書美への感性と書法(技術)・章法(構成力)を自らが磨いていく学び方。

自運...臨書で得られた感性や技術を土台に、心に感じ入るものがあった詩文を、書体(篆書・隸書・草書・行書・楷書)、書風、文字構成、紙面構成、墨色、墨の濃淡、墨量の変化、等を熟慮・試行していった結果、無心に運筆し書き上げること。

漢字仮名交じりの書...(指導要領解説書より)漢字仮名交じりの詩歌や文章・語句などを素材として書いた書。

2 学習指導要領の内容

A 表現 に記載されている内容

(1) 漢字仮名交じりの書

- ア 表現と用具・用材との基本的な関係
- イ 漢字と仮名の調和した線質の表し方
- ウ 字形、文字の大きさと全体の構成
- エ 目的や用途に即した形式と表し方
- オ 意図に基づく表現の構想と工夫

3 4 観点の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
<p>素材となる詩文をはじめ、書体、墨の濃さ、墨の分量、文字の大きさ、文字の形、文字の配置、運筆の速度、筆の大きさ、等について主体的に取り組むことができたか。また、それらをまとめることが出来たか。</p>	<p>選択した詩文の「どこに」「何に」引かれたか自己分析でき、その「引かれたもの」や「情感」を表現するのに、左記の項目について、熟考・試行して決定できたか。そのことが結果として、充分表現できたか判断できたか。最終的な作品選別では、収まりがよいもの・余白がはっきりしているものを選べたか。</p>	<p>詩文に「引かれたもの」や「情感」を表現するのに熟考・試行できたか。その結果、より効果的な表現にできたか。しかも数多く書くことを通して、徐々に無心で書ける部分が増えていき、より自然な表現が実現出来たか。</p>	<p>自分に生まれた「引かれたもの」「情感」を表現するのに、「書体の選択」「墨の濃さの選択」「その濃さの作り方」「筆の大きさの選択」「良い状態の毛の重要さ」「墨量の変化」「文字の大きさの変化」「字形の変化」「余白のあり方」等の表現上の観点について、どのような意義や効果があるのか理解出来たか。その上で、最終的な作品の選別時には、「文字の収まり方と余白」が最重要点になることを理解して、選別できたか。</p>

4 具体的な評価計画（8時間配当）

学習内容	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	判断基準（評価基準） A 十分満足できる B おおむね満足できる
1・2時間目 語句決め	語句決めの条件 1 漢字仮名交じりの6文字以上の語句 2 1を満たせばカタカナ・アルファベットが混じっても良く、字数も無制限 各自用意の資料(歌詞、書物)や書道室の「現代墨場必携」で主体的に、各自の心に残る語句が探せた (関心意欲態度)	試作品	A 適度な濃さである。 漢字仮名10文字以上3行書き以上である 引かれた所が直感できるものである 構成を考えた所がある B やや薄い墨である 漢字仮名6文字である 入れてみただけ
	磨墨	少量ずつ磨って適度な濃さにできたか(関心意欲、知識)	試作品
試作1(自力で) (自己保管 2枚)	自己決定した語句を思いのままに書いてみる (関心意欲、技能表現)	試作品	A 引かれた所が直感できるものである。構成を考えた所がある。 B 入れてみただけ
参考例をもらおう	生徒が参考例を書いてもらえる条件 1 試作を用意する 2 自身の筆を用意する (関心意欲、思考、技能)	範書への見方	A 書きやすい状態の筆である 書体が明確である 範書をよく観ている B 書きやすすくない筆の状態 書体が曖昧である 範書に関心がない
試作2 (自力or参考例で) (自己保管 2枚)	範書を参考に文字練習する 範書のない場合は、書体を意識して練習する (関心意欲、思考、技能)	練習作品	A 書体が明確に表現されている 構成を考えたあとがある 範書を活かした練習がなされている B 書体が曖昧である 注意点が曖昧である
3・4時間目 記名は、本文の墨と同じ濃度で、全作品に施す。	本文の墨と同濃度で記名する 記名は良い位置・良い大きさで施す (関心意欲、思考、技能)	練習作品	A 本文の墨と同濃度で記名されている 記名の位置・大きさも良い B 本文の墨と同濃度で記名されている
試筆 (墨の濃度を3段階で) (自己保管 3枚)	墨の濃度を3段階で試筆する 実演を観察し、その方法を確認する (関心意欲、思考、技能) 墨の濃度を3段階で試筆 濃い	練習作品	A 自身の問題としてよく観察でき、濃度の3段階の表現が出来た 仕上げ時の濃度の方向を決められた B 濃度を変化させての表現が曖昧になった

	<p>やや薄い 極薄い 仕上げ時の濃度を決定する 〔条件A決定〕 (関心意欲、思考、技能)</p>		
<p>試筆 (文字の大きさを 変える) (自己保管 2枚)</p>	<p>文字に大・小をつける工夫で 意図を効果的に表す。 その文字を大きくする 周りの文字を小さくしてそ の文字を大きく見せる 大小の組合せを決定する 〔条件B決定〕 (関心意欲、思考、技能)</p>	練習 作品	<p>A その文字を大きくしてみた 周りの文字を小さくすることで その文字を大きく見せられた 大小の組合せが一応決められた</p> <p>-----</p> <p>B 文字の大きさを変えられない</p>
<p>試筆 (条件A・Bで書く) (自己保管 1枚以上)</p>	<p>自己決定した墨の濃度A、文 字の大小組合せBで書く (関心意欲、思考、技能)</p>		<p>A 自己決定した条件を意識して表 現できた</p> <p>-----</p> <p>B ただ書いた</p>
<p>5・6時間目 記名は、本文の墨と と同じ濃度で、全作 品に施す。</p>	<p>本文の墨と同濃度で記名する 記名は良い位置・良い大き さで施す (関心意欲、思考、技能)</p>	練習 作品	<p>A 本文の墨と同濃度で記名され ている 記名の位置・大きさも良い</p> <p>-----</p> <p>B 本文の墨と同濃度で記名され ている</p>
<p>試筆 (条件A・Bに加 えて、墨量を3種類 で書く) (自己保管 3枚)</p>	<p>条件A・Bに加えて、運筆速 度を上げ、墨量3種類で書く。 全体をたっぷりめ=潤で 全体をかすかすで=渴で 潤から滑へと織り交ぜて= 潤滑混合 墨量の有り様を決定〔条件 C決定〕 (関心意欲、思考、技能)</p>	練習 作品	<p>A 墨量3種類でという意識を持 つてある程度書き表せた</p> <p>-----</p> <p>B ただ書いた</p>
<p>試筆 (条件A・B・Cに 加えて、文字を変形 させて書く) (自己保管 3枚)</p>	<p>条件A・B・Cに加えて、文 字を変形させて書く 大きくする文字に合わせて 周りの文字を変形させて 各文字の余白に合わせて、 上下左右の文字を変形させ て 変形のさせ方決定〔条件D 決定〕 (関心意欲、思考、技能)</p>	練習 作品	<p>A 大きくする文字に合わせて周り の文字を変形してみる試みが見 られる。各文字の上下左右の関 連を考えた変形の試みが見られ る</p> <p>-----</p> <p>B ただ書いた</p>
<p>試筆 (条件A・B・C・ Dで書く) (自己保管 1枚以上)</p>	<p>条件A・B・C・Dのもと、 自分の構想を整理して書く (関心意欲、思考、技能)</p>		<p>A 自己決定した4つの条件を満 たすように表現しようという跡が 見える</p> <p>-----</p> <p>B ただ書いた</p>
<p>7・8時間目 記名は、本文の墨と と同じ濃度で、全作 品に施す。</p>	<p>本文の墨と同濃度で記名する 記名は良い位置・良い大き さで施す (関心意欲、思考、技能)</p>	練習 作品	<p>A 本文の墨と同濃度で記名され ている 記名の位置・大きさも良い</p> <p>-----</p> <p>B 本文の墨と同濃度で記名され ている</p>

清書 (条件A・B・C・Dに、余白と配字にも注意し清書する)	条件A・B・C・Dに加えて、文字・文字群の余白と文字配置にも注意しながら、構想が自然に表せるまで、清書になる候補作品を数多く書く。 (関心意欲、思考、技能)	清書候補作品	A 構想や注意点が自然に表せるまでという意識で、数多く書けた ----- B ただ書いた
	試筆も加えた清書候補作品から、構想が自然に表された作品を1点自己選別する (関心意欲、思考、技能)	清書作品	A 構想が自然に表された作品を選ぶことが出来た ----- B ただ書いたものの中から選んだ

A 評価規準作成について

実技の「どこをどのように観ていくか」、授業者として明確に自覚したいという視点で作成してみた。また同時に、生徒に対しては、「どこをどう観られているか」を「どういう形で示すことが出来るのだろうか」、という視点で作成してみた。しかしながら、書道に内包する歴史的内容や書の美に対する知識量や実践力の不足を痛感せずにはいられなかった。

B 観点別評価について

芸術科書道における観点別評価について、観ていきたい点。

関心・意欲・態度

- ・芸術全般に対して
把握する手段：プリント等への書き込みの量と内容。書との関連を考える。
- ・書道の歴史、古典の背景、書人の人物像等に対して
把握する手段：VTR等をしっかり視た上で、プリント等への書き込みの量と内容
- ・書道用具の作られ方を理解し、後始末も含めて丁寧に扱うことに対して
把握する手段：VTR等をしっかり視た上で、プリント等への書き込みの量と内容
：筆・墨・硯の手入れ方を注視する
- ・自分が使用する墨汁を、濃さや量を考慮しながら、自身の手で磨って作ることにに対して
把握する手段：教えた磨り方を守っているか見る。
：書かれた作品の墨の濃さを見る。
- ・適度な濃さの墨で、丁寧に、どれくらいの枚数・字数を書いたかに対して
把握する手段：範書で提示した墨の濃さと比較する。(授業者が)
：一点一画を大事にしているかを見る。
：枚数・字数を確認する。プリント等への書き取りの量と内容
- ・技法に対して
把握する手段：古典、参考例、範書への見方を観察する。

思考・判断

- ・芸術全般に対して
把握する手段：プリント等への書き込みの量と内容。書との関連を考える。
- ・書道の歴史、古典の背景、書人の人物像等に対して
把握する手段：VTR等をしっかり視た上で、プリント等への書き込みの量と内容。
書体変遷の必然性、時代状況、書人の思い等を予想する。

- ・書道用具の作られ方を理解し、後始末も含めて丁寧に扱うことに対して
把握する手段：VTR等をしっかり視た上で、プリント等への書き込みの量と内容
：筆・墨・硯の良い手入れ方を判断し実践する
- ・自分が使用する墨汁を、濃さや量を考慮しながら、自身の手で磨って作ることにに対して
把握する手段：良い磨り方を理解の上で、実践しているか見る。
：適度な墨の濃さかを判断しているかを見る。
- ・適度な濃さの墨で、丁寧に、どれくらいの枚数・字数を書いたかに対して
把握する手段：範書で提示された墨の濃さと比較・検討する。
：一点一画を大事にしているかを見る。
：枚数・字数を確認する。プリント等への書き取りの量と内容
- ・技法に対して 古典、参考例、範書への見方を観察する
把握する手段：点画の用筆・運筆、文字内外の余白、筆の含墨量等を観察・予想する 試筆する
良くできた点・良くなかった点を観察・判断する 改良する点を再考する 試筆する 観察・判断・予想する 試筆する 何度も繰り返す
これらを作品で把握していく。

技能・表現

- ・芸術全般に対して
把握する手段：プリント等への書き込みの量と内容。書との関連を考える。意図を持った表現が
徐々に自然な表現になるよう練習している姿を把握する。
- ・書道の歴史、古典の背景、書人の人物像等に対して
把握する手段：VTR等をしっかり視た上で、プリント等への書き込みの量と内容。
知り得た情報から湧いてきた情感を抱きながら、一筆ごと書いているかを見る。
- ・書道用具の作られ方を理解し、後始末も含めて丁寧に扱うことに対して
把握する手段：VTR等をしっかり視た上で、プリント等への書き込みの量と内容
：筆・墨・硯の良い手入れ方を実践する。
- ・自分が使用する墨汁を、濃さや量を考慮しながら、自身の手で磨って作ることにに対して
把握する手段：良い磨り方で作る。
：適度な墨の濃さ、意図の沿う墨の濃さで書いているかを見る。
- ・適度な濃さの墨で、丁寧に、どれくらいの枚数・字数を書いたかに対して
把握する手段：範書で提示された墨の濃さと比較・検討する。
：一点一画を大事にしているかを見る。
：枚数・字数を確認する。プリント等への書き取りの量と内容
- ・技法に対して 古典、参考例、範書への見方を観察する
把握する手段：点画の用筆・運筆、文字内外の余白、筆の含墨量等を観察・予想する 試筆する
良くできた点・良くなかった点を観察・判断する 改良する点を再考する 試筆する 観察・判断・予想する 試筆する 何度も繰り返す
これらを作品で把握していく。

知識・理解

前述してきたものがなされて、知識・理解が徐々に深まると考える。詳述すると、提供されたり・自分が収集した活字上・映像上の情報を理解・咀嚼して少しでも自身のものにして、作品に表現する。そういう姿勢が表現技法上でも同様に実践されて（観察・予想・書く・観察・判断・再考・書く）、理解の深まりが増していくのであると考えている。書では、もっとも大事な姿勢である。

C 観点別評価による生徒の変化

生徒に変化が生まれるには、まだまだ時間と実践が必要で、ここに述べられるほどの変化を生み出せない。

D まとめ

私自身の知識量、技術力、表現力、判断力、等を増強することが、評価する側としてのなすべきことだと肝に銘じて、真摯に評価にあたっていきたいと思う。

【英語】

(英語科、0C ・英語 ・) 新課程3カ年の授業改善のための評価の工夫

担当 教諭

1 学習指導要領の内容

〔0C〕日常生活の身近な話題について、英語を聞いたり話したりして、情報や考えなどを理解し、伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

〔英語〕日常的な話題について、聞いたことや読んだことを理解し、情報や考えなどを英語で話したり書いたりして伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

〔英語〕幅広い話題について、聞いたことや読んだことを理解し、情報や考えなどを英語で話したり書いたりして伝える能力をさらに伸ばすとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

2 4観点の評価基準

関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	知識・理解
コミュニケーションに関心を持ち、積極的に言語活動を行い、コミュニケーションをはかるようとする。	幅広い話題について、情報や考えなど伝えたいことを整理して英語で話したり書いたりして表現する。	幅広い話題について、英語を聞いたり読んだりして、情報や考えなど相手に伝えようとするのを整理して理解する。	幅広い話題について英語の学習を通して、言語やその運用についての知識を身につけるとともに、その背景にある文化などを理解している。

3 3カ年を通じて形成されつつある授業・評価に関する英語科3学年内の共通理解：

英語は、座学ではなく実技教科であるので、4技能(Listening, Speaking, Reading, Writing)のskillを総合的に伸ばしていけるような授業を目指す。

すべての課について4観点の能力を高めようとするとう無理が生じるので、各定期考査までに10~12時間かけて精読する課一つと、2~3時間で速読する課一つと課によって軽重を設けている。

・精読する課：Listening, 音読を繰り返して本文の英語を徹底して刷り込んで、理解の能力を高め、刷り込んだ英語を使って表現する能力まで求める。

・速読する課：知識・理解が身につけばよしとする。

3カ年を通して、授業の中でShadow Reading等の刷り込みトレーニングを繰り返し行う。副教材についても、CD教材のついたものを選び、家庭学習においても音を聞いて真似ることが、英語力の向上につながることを実感させるような様々なテストを行った。例えば、学年共通のListening Comprehension Test、Dictation Test、音読テストを 期末考査については、必ず50分のListening Testを実施するなどである。

評価配分に関して、学年共通問題の定期考査を6割として、平常点は、4割とする。平常点の中身に関しては、各教科担当が、それぞれ工夫しながら試行し、学年で共通して行えそうな活動（1クラス40人の授業で、大多数の生徒が集中して取り組める活動）であると判断できれば、共通して行うこととする。指導しながら、40人を評価することは不可能なので、この3年間は、とりあえず、筆記テスト以外で、40人のクラスでも測定・点数化して、客観的に評価できる活動を増やしていき、その結果を平常点として評価してきた。

4. 音読テスト：3年間の実践

、1年目の反省を踏まえて改良した点：

音読チェックシートを作って、発音、アクセント、ポーズの誤った箇所に記号を書き、生徒自身がどこを読み間違えたか確認できるようにした。

全体的な読みの印象点(A~C)もチェックシートに書き込み、生徒がすぐ確認できるようにした。

2時間かけて、全員に40秒音読させ、じっくりと評価できるようにした。

、2年目の反省を踏まえて改良した点：

生徒も教員も音読テストに慣れてきたので、1時間で全員に30秒の音読をさせ評価した。

同じキング牧師の“ I Have a Dream ”の教材を使って、3回テストを行うことを予め生徒に伝えて、しっかり取り組むように促した。(1.春休みの課題テストとして50問のDictationテスト 2.音読テスト 3.中間考査において10問の空所補充テスト)

具体的な評価の一例：“ I Have a Dream ”のDictationテスト・音読テスト・空所補充問題における評価

学習内容	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	判断基準（評価基準）
Dictationテスト (1時間)	春休み中に和訳を読んで内容や単語の意味を理解し、本文CDをよく聞いて、音読・シャドーイング・ディクテーションに取り組むことが出来たか	Dictation 50語 の空所補充問題	A 30点以上 B 10~30点 C 10点未満
音読テスト (1時間)	自然なスピードか 単語の発音、アクセントは正しいか 意味を理解して、ポーズを取れたか 正しく、自然に気持ちをこめて読めたか	各自30秒の音読	読めた行数 読み間違えた語数 ポーズを間違えた回数 A気持ちを込めて読んでいる Bテンポよく、ほぼ正しい発音で読んでいる C遅く、つかえや誤りが多い
1学期中間考査 空所補充	単語の意味を理解し、文脈に即した単語を補充することができるか。覚えた単語を正しい綴りで書くことができるか。	空所補充問題 10問	A 8点以上 B 5~7点 C 5点未満

・生徒が書いた音読テストを終えての感想：

1年目：

- ・緊張してしまい、思ったよりうまく読めなかった。
- ・練習不足だった。もっとたくさん読む練習をすればよかった。
- ・発音を間違えてしまった。もっとCDを聞いておけばよかった。
- ・友達の中には、感情がこもっていて、とても上手な人がいた。
- ・練習すればうまくなるのだと思った。
- ・ミスをしたのが悔しい。速く、正確に読めるようにしたい。

2年目：

- ・練習不足を後悔し、次回は頑張りたい。(多数)
- ・CDを聞かずに練習をしたので、発音を間違えて覚えていた。
- ・中学で習った単語を読み間違えたのが、ショックだった。
- ・リエゾンや区切りをCDを聞いてよく確認したので気持ちをこめて読むことができた。
- ・友達の音読を聞いていると「この発音が違う！」などがわかるようになった。
- ・スピーチ・コンテストの練習が役に立った。
- ・速音読をしたら、CDのスピードについていけるようになった。
- ・緊張のため、数字の読み方がこんがらがった。
- ・早く読もうと思ってポーズを置かない所があったが、そうすると相手に意味が伝わりにくいということがわかった。
- ・3年生になったら、他の人に負けないくらい頑張りたい。
- ・今回手チェックされたところを見直そうと思った。
- ・速く読もうとして、発音ができなかった。
- ・日頃の授業の受け方が、こういうところで結果として出てくるんだなと思った。
- ・前置詞が2個ある文で詰まる人が多い。
- ・練習量の差がでると思った。
- ・CDを聞いてもよく分からない単語があった。

3年目：

- ・去年よりスラスラ読めた気がする。
- ・3年だけあってみんな上手かった。去年よりできたし、楽しかった。
- ・読み間違いが多くてあまり良くなかった。CDを全然聞けなかったのがいけなかったと思う。
- ・曖昧にしか覚えていなかったところは、やはり誤って読んでしまった。
- ・リスニングをしっかりとやったが、緊張して速く読み過ぎてしまい、気持ちを込めて読めなかった。
- ・友達に、リエゾンをした方がよい箇所を教えてもらい、スムーズに読めるようになった。
- ・たくさん練習したので良かった。
- ・××さんの音読は、発音がきれいで、読んでいるというより話しているように聞こえた。
- ・リズムを感じて読め、2年の時より上達した気がする。
- ・CDを聞くだけじゃなくて、もっと声に出して練習すれば良かった。

・3年間の音読テスト実践を通して感じたこと：

生徒の感想を読んでもみると1年目は、単に練習不足を後悔する感想が多かったのが、2年目になると具体的に何を練習すればよかったかに目が向くようになり、3年目になると、自分の上達ぶりを実感したり、楽しめたという感想、さらにレベルの高い目標を設定しようという意欲的な態度、友達同士で協力し合っ
て練習している様子が伺える感想が増えてきた。このことから、音読テストのようなクラス全体の前で発表する活動を繰り返し行くと、大多数の生徒が、自分なりに一生懸命に練習をしてきて、英語を学習する「関心・意欲・態度」が高まるということが分かった。

課題テストで行ったDictationテストは、自主課題として行うにはかなりタスクレベルの高い活動なので、元々意欲の高い4～5名の生徒しか、A・Bの評価を得ることができなかった。しかし、初めにショックを与えて、次の音読テストを目指して頑張ろうという意欲を持たせるカンフル剤的效果を発揮してくれたと思う。

中間考査で行った空所補充問題は、音読テストの練習や音読テスト中にクラスメートの音読を繰り返し聞く体験を通じて、英語の音が頭に定着していることが伺える結果となった。比較的英語の苦手な生徒も綴り間違いはあるにせよ、ほとんどの単語を埋めていた。“at last”と書かなければいけないところを“a last”と書いている答案がいくつかあったが、tとlが重なると、前のtを脱落させて発音するという「知

識」は身につけていないかもしれないが、“ at last ” の音が頭の中に定着していることが伺え、音読テストの効果が実感できた。

7. 今後の課題：

評価の目的は、生徒と教師に学習したことをフィードバックする事なので、測定して、点数化できるものだけの評価することに追われないようにする必要がある。測定して点数化する活動と、それ以外の方法で、評価すべき活動を区別し、きちんと整理していく必要がある。

3年の2学期にSpeech Contestを行うが、本来、3年間習ってきたことの集大成になるはずの活動が、段階的な練習もなしに、行うことになりそうである。40人を短時間に評価することが難しいため、Speakingの発表活動や自由作文をほとんど扱うことができなかつた。今後は、総合英語においてSpeakingの活動をもっと取り入れていきたい。ペアーやグループによる評価や自己評価などの形で、点数化はしないが、ふりかえりによって評価する活動を増やしてゆく必要がある。

「聞いたことや読んだことを理解し、情報や考えなどを英語で話したり書いたりして伝える能力」を伸ばせるような活動をほとんど、取り入れていない気がするので、今後、音読テスト以外にも学年で協力して、「関心・意欲・態度」を高めていけるような活動を工夫して、増やしていきたい。

「表現の能力」に関して、公平なテストを行い、40人の生徒を客観的に評価するには、教師間のチームワークが必要である。まず、3年間でどんな能力をつけさせたいかよく話し合って目標を設定すること、各段階に応じた発表活動の内容・評価規準・評価基準のアイデアを出し合うこと、空き時間を融通して複数の教員が評価を手伝うなど協力し合うことなどが、今後必要になってくるように思われる。

【家庭】

第2学年（家庭基礎） 評価計画

担当 教諭

1 単元「4章よりよい生活を創るPART1楽しく食べる」(10時間)

2 学習指導要領の内容

栄養、食品、調理、食品衛生などに関する基礎的な知識と技術を習得させ、家族の食生活を健康で安全に営むことができるようにする。

3 4観点の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
・食生活や食物・食品に関心を持ち、自らの食生活について、健康を維持するだけでなく、精神的な豊かさを向上させる意味を併せ持つことを理解し、そのための知識や技術の習得、改善のための考察や行動に意欲的に取り組もうとする。	・自らの食生活について栄養、環境、食品の選択、経済性などの視点から、問題点・課題を見出すことができる。 ・今後のよりよい食生活を営むために、上記の視点において、問題点・課題を解決する方向を見出すことができる。	・食品の実験においては調理上の特徴を理解し、実験の方法、考察、実験結果などを整理し、レポート等にまとめることができる。 ・調理実習において、調理のための基礎的な技術が習得できており、知識と融合させて献立を考え、食品を選び、調理をするなどの行動ができる。	・食べることの意味、栄養に関する知識が習得できており、また食品の調理上の特徴を理解している。 ・保存、食中毒、添加物、農薬など食品の選択に関わる基本的な知識を身につけている。

4 具体的な評価計画

学習内容	学習活動における具体的な評価 規準	評 価 資 料	判断基準（評価基準） A 十分満足できる B おおむね満足できる
食べることと健康	自分の食生活を振り返って、 分析しようとする。 （関心・意欲・態度）	プ リ ン ト	A 自分の食生活を細かく記述でき、こ れからどう改善すべきかを考えられる。 B 食生活を振り返って細かく記述でき る。
栄養と食品	各年代ごとの栄養摂取量のめや すについて数値のちがいが理解 できる。 （思考・判断）	試験	A 家族のメンバーについて、食品摂取 上どう配慮すべきかを判断できる。 B 家族についての食品群別摂取量を読 みとることができる。
	栄養素の働きについて理解して いる。 （知識・理解）	試験	A 5つの栄養素について、消化・吸収 のメカニズムを理解、過不足が身体 にどのような影響を及ぼすかを知識と して習得している。 B それぞれの栄養素について特徴を理 解している。
	各食品の特徴 （知識・理解）	試験	A それぞれの栄養素を代表する食品に ついて、その特徴を理解し、自分の食 生活に適切に取り入れることができる。 B 食品の特徴を理解している。
安全な食生活	食品の保存 （思考・判断）	プ リ ン ト	A 日常の食生活の中で、食品がどう保 存されているかを調べ、その理由が 理解できる。 B それぞれの食品を適切に保存するこ とができる。
	食品の安全性 （思考・判断）	プ リ ン ト	A 食品添加物、農薬等の必要性和人体 環境への影響を自分なりに総合的に 判断し、日常の食生活に生かすことが できる。 B 安全な食品とは何かを判断できる。
調理をしよう	イーストと小麦粉 （技能・表現） （関心・意欲・態度）	プ リ ン ト 実 習 レ ポ ー ト	A イーストを適切に扱うことができ、 積極的に調理に取り組み、後片付け までしっかりできる。 B 考察を含めてレポートが作成できる。 C 調理に積極的にとりくんでいる。 レポートが提出できる。
	日本料理の基礎 （同上）	プ リ ン ト 実 習 レ ポ ー ト	A 和風のだしをとり、食品の特性を生 かした調理ができる。積極的に実習に 取り組んでいる。 B 意欲的に実習に取り組んでいる。

	中華料理の基礎 (同上)	プ リ ン ト 実 習 レ ポ ー ト	A 中華料理の特徴を理解し、適切に調理できる。 B 意欲的に調理に取り組んでいる
	郷土料理 寿司の基本	プ リ ン ト 実 習 レ ポ ー ト	A すし飯が調理でき、食品を適切に扱うことができる B 意欲的に作業できる。

A 評価規準作成のポイント

家庭科の教科特性として、普段の生活で知識として、または技術としてすでに習得していることが少なくない。高校の家庭基礎では、自らの生活のあらゆる場面でどう生きるかを自分で考え、自分で判断することができる個人を目指している。社会の急速な変化に迅速に対応し、自らの意見をしっかり持つことができることを評価規準としている。

B 観点別評価について

関心・意欲・態度

実習に対してどれだけ積極的に取り組んでいるか、ノートの取り方が単に板書を写しているだけか、レポートに自分の意見をはっきりと示しているか、などを評価した。

思考・判断

いくつかの授業の場面で、あえて結論を出さないことを心がけた。たとえば最近ブームになっているサプリメントについて本当に必要か、調理実習である部分を班で考えて自由にアレンジできるように設定するなど、これらを評価した。

技能・表現

主に実習の技術力を評価した。個性の表現ということも評価対象とした。個人の経験値で差が出てしまうが、評価の一部分でしかないため、技術が優れていても他の評価規準で基準に達しない場合も多々ある。

知識・理解

考査でどれだけ理解しているかを評価することが中心となってしまうが、考査問題も単に知識だけを問う問題ではなく、自分で考え判断する問題を加えることで、単なる丸暗記では解答できない部分を加えた。

C 観点別評価による生徒の変化

家庭科は以前から実習教科ということで、試験の点数だけで評価をすることは全くない。観点別という評価方法になってからもその評価の観点が4つに整理・文章化されただけで、評価の方法はさほど変わっていないと思う。しかし、生徒たちからみるとなぜここがBなのか、Cなのかを納得させられる評価をしないといけない。点数で出てこない部分は大変難しい。評価対象人数が多いと、困難である。

D まとめ

単位数が少ないため、評価対象人数が多い。これは点数で明確に示される考査で評価することが一番正確であり、評価される生徒にとってもわかりやすい。対象人数を少なくすることがこの観点別評価を実施するには一番必要なことと考える。それが無理であるならば、考査問題に各観点からの問題を出題し、評価することができれば理想的である。

第4部 まとめ

～ 評価を見直すことの意味～

【1】指導と評価の一体化

評価とは生徒にとって、学習の成果を明確化する意味の他に、教員にとっても自分の指導の成果を確認する働きがある。評価をすることで、指導の効果や効率をもう一度見直すことができる。

それはテストを実施して点数が悪かったことで授業が理解されていないという単純なものではない。「関心・意欲・態度」の観点では生徒が学ぶことの楽しさや意欲の向上につながったかどうか。知識が試験のための一時的な記憶ではなく、本当の意味の知識として生徒に定着したかどうか。評価の観点が多ければ多いほど、自分の指導について多面的に見直すことができる。

生徒を評価するとは、教員から生徒への一方的な行為ではなく、逆に生徒を通して自分自身の指導を見直すきっかけとなるべきものである。このことを「指導と評価の一体化」という。

今回、評価をテーマに「学力向上フロンティアハイスクール事業」で本校の職員にも、時間と手間をかけて研究に協力をしてもらった。それを仕事が増えるという観点でとらえられて、なかなか理解が得られない場面も多くあった。

しかし、評価の見直しとは指導の見直しであるということを理解して、評価というものを見直すことで少しでも指導力の向上につながるのであれば意味のあったことであると思う。

われわれ教員は長い間同じ教科の指導をしていると、どうしてもマンネリに陥りやすい。よほど意識しない限りその危険性は排除できない。

長年にわたる自分の指導を見直す一つのきっかけとなれば、この研究も意味のあるものであったと思う。確かに1年間の評価規準表を作成するには大変な労力を必要とする。しかし、それを一度に行う必要はない。毎年少しずつ、1単元ずつでも評価規準表を作成していけば、その積み重ねが自分の指導にとっては大きな財産になっていくものだと思う。

【2】生徒一人一人に応じた指導へ

評価を細かく行っていくことは、生徒一人一人をよく観察することにつながる。たとえば、評価の場面で「授業中の観察」があれば、今まで以上に生徒の授業中の様子を意識するようになる。もちろん、それを一つ一つチェックをして点数化する必要は必ずしもない。ただ、目についたことを評価の対象とすると決めているだけでも、こちらの生徒を観察する目が違ってくる。その中で、今までは気づけなかったようなことに気づくこともあるだろう。

例えば、情報の授業で一通り説明をしてから課題を提出させ、その課題の出来具合で評価をすることとする。すると、一生懸命やるけれども時間内に終わらない生徒と、寝ていたり他のことをして時間内に終わらない生徒が、結果的には同じ「時間内に終わらなかった」ことになってしまう。

しかし、「授業中に課題を終わらせようと努力をする」という「関心・意欲・態度」を評価の対象とすると、作業中の生徒の様子を観察し、この二人の生徒に対する評価は異なってくる。

このケースでは、同じ「時間内に終わらない」という結果でも、生徒一人一人によって事情が異なる。それは、生徒を観察することでわかることである。そこから生徒に応じた指導が生まれてくる。

評価につながらなくても、生徒の観察は必要ではある。しかし、それはわかってはいても、正確に観察し、それに応じた個別の指導をすることは実際には難しい。評価の規準とすることでより客観的な観察と、そこから生じる指導が可能となるのではないか。

また、「関心・意欲・態度」の観点だけでなく、その他の観点でも、一人一人の得意とする点や苦手な点を把握するきっかけにもなる。例えば、暗記中心のテストでは点数がとれなくても、文章を書かせるととても説得力のある上手な文章を書く生徒もいる。このようなことも、「知識・理解」を中心とする評価をしていたのではなかなか把握しにくい点である。「技能・表現」を評価するときにはわかることである。多くの観点で生徒を評価するということは、多くの点から生徒を見つめるということである。その中で、従来の評価の仕方では評価されなかつ

た生徒の別の一面を見だし、それを生かすことで生徒をのばすことも可能になるのではないだろうか。

以上に述べてきたように、「評価の見直し」とは評価だけの問題ではなく、教員の教育活動の見直しにつながることである。その大前提を理解しないと、形だけの評価規準表の作成などそれこそ時間の浪費の作業に終わってしまう。評価の見直しとは決して説明責任を果たすためだけのものではない。それは教員の指導の改善、生徒の広い意味での学力の向上につながるべきものであると信じている。

参考資料 「学力向上フロンティアニュース」

職員への啓発活動の一環として、発行してきたものです。本校での研究の経緯がわかればと思います、いくつかを紹介します。

学力向上フロンティアニュース No.12

年間まとめと展望（２） 質問への回答と視察報告

学習指導委員会

今回・次回と視察報告を兼ねて本事業に関する代表的な質問に回答し、今年度のまとめにしたいと思います。

何のために評価改善をするのか？

「確かな学力」「絶対評価」「文部科学省」「学習指導要領」「お上の仕事」「評価改善」…。特に〃の部分に反感を覚えるんだらうなあと感じます。確かに、「これまでの評価ではダメです。こうしてください。」と命令されたら、これまでの自分の努力を否定されたようで良い気持ちはしません。

しかし、アンケートでも見られたように、思考力・判断力・発信力・表現力の乏しさ、学習意欲・基礎的知識量の低下といった生徒の現状には、多くの先生方が賛同していただけるのではないかと思います。そしてこうした現状への対処として、「わかる授業」や「学ぶ意欲が見いだせる授業」「学びを追究する方法を身に付けることができる授業」が求められていることも、ご理解頂けるかと思います。世間からは、「漠然と教科書の内容を教えていれば良い時代は終わったんだ」というメッセージが届いています。生徒に何を身に付けさせたいのか？「生きる力」「確かな学力」という視点からしっかりと教員が意識することが求められています。

しかし、授業から変えてゆくことはなかなか難しい。と言うわけで、評価からの改善が提案されているのです。「評価規準」という言葉よりも、「達成目標」という言葉の方が抵抗なく受け入れられるかもしれません。授業は組織的なものですから、目標を立てることが大切です。目標を先生と生徒が共有し、その目標に対してどれほど達成できたかを測る。これが「評価規準」という考え方なのです。

評価方法を変えることで授業を変えていく。評価を変えることは、授業を変えるための手段に過ぎないと言っても過言ではないでしょう。評価規準を作ることが本来の目的ではありません。また、そんなもの作らなくても、授業に自信があるとおっしゃる先生もおられるでしょう。たぶん、その先生の授業は、生徒にとって「わかる授業」「学ぶ意欲が見いだせる授業」となっているのです。こうした授業は先生の頭の中に「達成目標」が揺るがず存在し、生徒とも共有化されているのではないのでしょうか。しかし、多くの先生方は、生徒の学習意欲のなさに立ち向かいながらもがいている（あるいは立ち向かえていない）だから自信が持てない。

なぜ、評価改善が求められているのか。生徒に生きる力を身に付けてもらいたい。そのためには授業を今まで以上に魅力があるものにしたい。そのための評価見直しの作業とご理解下さい。

相対評価じゃ何でいけないのだろうか？

学力や評価をめぐっては、次のことが求められています。学力については、知識の量のみでとらえるのではなく、基礎的・基本的な内容を確実に身に付けることはもとより、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」がはぐくまれているかどうかによってとらえる必要があるとされています。また、これからの評価においては、目標に照らしてその実現状況を見る評価が一層重視されるとともに、生徒一人一人の良い点や可能性、進歩の状況などを評価するため、個人内評

価が工夫されることが期待されています。そして、評価内容については、日常的に生徒や保護者に十分説明し、共通理解が図られることが求められています。(以上、教育課程審議会答申より)《こんなのを引用するから反感買うんですね》

しかしこれらが、「絶対評価」といわれる内容です。目標に照らしてその実現状況を・・・という点では「目標に準拠した評価」と言い換えて良いでしょう。また、生きる力がはぐくまれて・・・という点では「観点別評価」と言い換えられるでしょう。一人一人の学習状況を把握し、発展や不足への手だてを考えるとという点では「個人内評価」と言い換えることができます。

「評価規準」という「学習の質」で評価することの客観性への不安、授業者間・学校間の格差への不安から「相対評価」じゃ何でいけないのかという声もあります。「相対評価」は、「集団に準拠した評価」です。集団全体に学ぶ意欲があり、競争原理が働いている場合には、効果が期待できます。しかし逆に、授業をやらなくても平均点60点のテストを作れば評価することが可能な評価なのです。

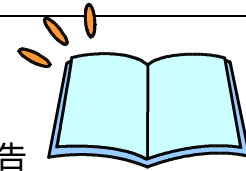
まずは、各先生方でご自分の教科での「確かな学力」の付け方をそれぞれ組み立てることが必要だと思います。これが、「学習目標」であり「評価規準」です。導入では具体的世界を体感させ、その原理原則を思考させてから知識理解に入る教科もあれば、知識理解を最初にピンバシやって問題解決の自信がついたら、応用として具体的な世界に入る教科もあるでしょう。5分でできる課題もあれば、1週間かかる課題もある。しかし、そこには必ず段階を追った「学習目標」があるはずで、これまでは、「学習内容」(教科書p ~)と60点平均のテストでの評価でした(が多かったと思います)。「目標に準拠した評価」とは、「学習目標」という質に照らして評価をしていこうという評価です。

評価の客観性への不安

評価には、客観性に対して妥当性という視点があります。どちらが大事でしょう。先生の出した評価に対して、出された生徒も他の生徒も妥当であると思えることのほうが大事なのではないでしょうか。また、60点平均だが知識や技能詰め込みで、3日で忘れてしまうようなテストが妥当だとは思えません。その意味で、学習目標を生徒と共有することやハードル(評価規準)をしっかりと見せることで、生徒の自己評価、相互評価、教師の評価の3つが一致できるようになることが理想の評価像なのでしょう。そのために、評価規準や観点をしっかりと定めることが、妥当性と客観性を保つ秘訣といえるでしょう。

観点別評価の例として、芸術の評価について考えてみましょう。作品の評価と教科としての評価(評定)を混同してはいけません。作品のできは悪くても、授業に取り組む姿勢が評価されることもあります。あくまでも、学習目標に照らしての評価です。観点別評価とは、一つの作品を多観点から見ることではなく、作品の結果だけで教科としての評価をしないことなのです。

回答を書いていくと、先生方にあれもこれもと課題を積み重ねていくのではないかという思いがします。しかし、この事業で私たちに求められているのは、「新しい学力観に基づく評価」という課題に対して、その本質を見失わず、いかに省力化し簡略化した評価の方法を作っていくかということです。本質は、「生きる力をはぐくむ授業」だということは忘れていきたいと思います。



年間まとめと展望（３） 質問への回答と視察報告

学習指導委員会

前回に引き続き、視察報告を兼ねて本事業に関する代表的な質問への回答の続きです。

観点別評価では、受験に対応できないのではないだろうか？

「大学は、高校の授業が変われば入試も変わるといい、高校は、大学入試が変われば授業も変わるという。」鶏が先か卵が先かという話ですが、お互いが歩み寄りをしていなければならないのではないのでしょうか。また、入試問題に全く変化は見られないのでしょうか？ 量に頼った詰め込み式の授業が受験対応と考えるのであるならば、それは対応できないと答えるしかないでしょう。しかし、そのような授業が果たして本当の意味で受験対応の授業といえるのでしょうか。学習内容に興味を持てば生徒は自主的に学習するようになる。そのことが本質なはずで。

次の数字は、今年の3年生の実態調査です。受験で使った科目を答えてもらったものです。「英語」が116名、「日本史」が46名。「英語」よりも「面接」の方が多いです。270名中、受験で使わない160名にとっての英語の学習目標とは何でしょう？ 日本史選択者200名中、受験で使わない150名にとっての日本史の学習目標はどんな項目を設定すべきなのでしょう。私たちに求められているのは、教科書を教えるのではなく、教科書で何を教えるのかではないのでしょうか。

資料 本年度卒業生271名中有効回答237名

《質問》 受験で使った科目を全て選んでください。

面接126名 小論文・作文75名 一般教養・適性検査20名
 現代文120名 古文80名 漢文31名 英語126名
 数学・A35名 数学・B25名 数学 11名
 日本史46名 世界史6名 地理7名 政治経済17名
 物理16名 化学8名 生物11名 地学2名

次の数字は、私たちの目の前にいる生徒の実像に近い数字なのでしょうか？

当該教科の勉強が好きだ そう思うと答えた人数（％）

国語	数学	物理	化学	生物	地学	英語
16	14	15	12	16	16	17

当該教科の勉強は大切だ。 そう思うと答えた人数（％）

40	20	23	14	15	11	53
----	----	----	----	----	----	----

当該教科の勉強は入学試験や就職試験に関係なく大切だ。 そう思うと答えた人数（％）

38	12	14	9	11	9	46
----	----	----	---	----	---	----

平成14年度高等学校教育課程実施状況調査より（社会は15年度実施）

この数字をどう読めばよいのでしょうか。小中学校の数字もあるのですが、明らかに勉強が好きという数字が減っています。「勉強が嫌い」「必要でない」「おもしろくない」と思って座っている生徒がかなりいる。これに対して、どう授業で臨むのでしょうか。教科書を教えるだけ、作品や技能の高さを要求するだけで通用するのでしょうか。絶対評価にして何を評価するのか。私見ですが、「その教科・科目を学習し続ける能力を今の時点で評価すること」と考えます。いかがでしょうか？

観点別に分けて評価することへの難しさ

高等学校における各教科・科目等の学習の記録は、当該教科・科目の目標や内容に照らし、その実現状況を総合的に評価する「評定」のみです。しかしながら「評定に当たっては、ペーパーテスト等による知識や技能のみの評価など一部の観点に偏した評定が行われることのないように、「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、「技能・表現」、「知識・理解」の四つの観点による評価を十分踏まえながら評定を行っていくとともに、5段階の各段階の評定が個々の教師の主観に流れて客観性や信頼性を欠くことのないよう学校として留意する。」とされています。つまり、今のところ観点別に分けて評価することは求められていません。4（5）つの観点の評価を十分踏まえることだけが求められているにです。

その意味で、それぞれの科目の評価の観点を十分踏まえながら、まずは具体的な評価規準を設定するといった評価の工夫・改善を図ることが望まれているのです。

教師の負担増への懸念

関心・意欲・態度とは、何を評価するのか？

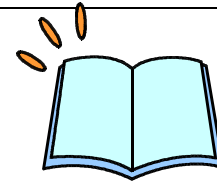
4観点の中で、最もやっかいとされているのがこの「関心・意欲・態度」です。中学校からは、部活動の練習試合中に先生が小テストの採点やプリントの点検をしていたという笑えない話も聞こえています。一方で、単元や授業ごとの学習と評価の計画表をきちんと作成することによって授業ごとの重点目標が定まっているので、様々な活動をやるにもかかわらず余裕を持って評価活動ができるという報告もあります。教科にもよるでしょうが、1時間の授業における評価項目は1つか2つ。4観点全部は無理です。それもその時間内でなく、テストや単元テストへ回すなどができます。

関心・意欲・態度については、次のことが大切です。生徒の性格・行動で評価するのではなく（それは生活指導）、育てた関心・意欲・態度の伸びを評価する。放任的な調べ学習ではなく、学び方を意識化する工夫がされた調べ学習での関心・意欲・態度の伸びを評価したい。

生徒が表現する方法を1つだけにしてはいけない。手を挙げる回数だけが意欲を示しているとは言えない。（詳しくは、「絶対評価成功の秘訣・運用の基本」をご覧ください）

授業中の観察からだけで興味・関心を見るのではなく、ノートの中身からでも興味関心は測れるのではないのでしょうか。ノートは板書を写すだけのものではありません。評価の場面を工夫することで、本質を見失わずに負担の軽減はできるのです。また、評価しやすい授業のやり方を工夫することも大切でしょう。

最後に、文芸作品などの鑑賞をどう評価するかです。大事なのは、作品の鑑賞によってその良さを感じたことが高い評価を得られるとは限らないことです。むしろ、気に入らない理由を的確に表現できたり、自分であればこのように仕上げるなどの意見を述べられることが、高い評価を得られるのではないのでしょうか。作品鑑賞の学習目的は、自分の好みを見分ける能力の育成と言えるのではないのでしょうか？



評価規準を作る

- 改めてその意味を整理する -

学習指導委員会

前回の職員会議で、評価規準作りをお願いしました。多くの教科が中間テストを控え、評価の時期になりました。中間テスト前に、是非それまで作った評価規準を生徒に配布することを目標に作って頂きたいと申しましたが、まだ二の足を踏んでいるという先生方も多いかと思えます。改めて、何のために何を作るのかを説明したいと思えます。

先生方の授業を次のように分析します。

学習内容	何を題材にするかということ。 例：教科書 p ~ 、教材、活動種目、など、
学習活動	生徒がどんな活動をするかということ。 例：講義を聴く、練習する、ゲームをする、話し合う、表現する、など
学習目標	生徒にみえる学習の到達目標。 例：問題ができる、覚えた、技能が身に付いた、表現ができた、など。
指導目標	学習の意義に照らして生徒に何を要求したのかという教師側の達成目標 体験目標、方向目標、到達目標に分けられる。 { 体験目標 体験を確認できた。体験したかしないかを評価。 方向目標 生徒の伸びを確認できた。到達の方向を段階で評価。 到達目標 学習目標と同じ。到達できたかどうかを評価。

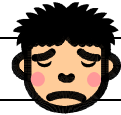
評価規準表とは、毎時間の授業について、何をやり、何を目標としたかをメモしていくという作業です。この作業を通して、教科書を教えるのではなく、教科書で何を教えたかを明確にし、また授業と評価の一体化を図っていくこととなります。決してこれまでの評価を否定するものではありません。これまで、漠然とやっていたものをきちんと分析して整理する作業です。あくまでも、生徒の学力をどう評価するかという視点に立ったとき、基本となる作業であるということをご理解下さい。

これまでも個人的に組織的にも評価に関して工夫をしてきましたと思えます。しかし、次のような課題も指摘されています。この作業は、こうした課題に答えるための一歩目の作業といえます。まずはやってみて欲しいと思えます。初めはしんどいですが、有効性はご理解頂けると思えます。

- | | |
|---|---|
| ア | これまでの評価が、知識・技能などの評価に重点が置かれがちであったこと。 |
| イ | 学習計画に対応する評価計画が明確でなかったこと。 |
| ウ | 評価結果が後の指導に十分生かされない傾向にあること。 |
| エ | 評価方法や評価規準が、生徒や保護者にきちんと説明されない傾向にあること。 |
| オ | 担当教員によって評価方法が異なるなど、教員相互の共通理解が十分図られていないこと。 |

次に年度末のフロンティアニュースの半分改訂版になりますが、職員研修会で各教科の記録から、疑問になっている所についてお答えします。

何のために評価改善をするのか？ これまでの評価じゃダメなのか？



確かに、「これまでの評価ではダメです。こうしてください。」と命令されたら、これまでの自分の努力を否定されたようで良い気持ちはしません。

しかし、職員アンケートでも見られたように、思考力・判断力・発信力・表現力の乏しさ、学習意欲・基礎的知識量の低下といった生徒の現状には、多くの先生方が賛同していただけるのではないかと思います。そしてこうした現状への対処として、「わかる授業」や「学ぶ意欲が見いだせる授業」「学びを追究する方法を身に付けることができる授業」が求められていることも、ご理解頂けるかと思います。世間からは、「漠然と教科書の内容を教えていれば良い時代は終わったんだ」というメッセージが届いています。生徒に何を身に付けさせたいのか？「生きる力」「確かな学力」という視点からしっかりと教員が意識することが求められています。また、それは社会全体の役割だとおっしゃる先生も、生徒の学習への参加意欲の欠如には悩まされていると思います。

しかし、授業から変えてゆくことはなかなか難しい。と言うわけで、評価からの改善が提案されているのです。「評価規準」という言葉よりも、「達成目標」という言葉の方が抵抗なく受け入れられるかもしれません。授業は組織的なものですから、目標を立てることが大切です。

目標を先生と生徒が共有し、その目標に対してどれほど達成できたかを測る。これが「評価規準」という考え方なのです。

評価方法を変えることで授業を変えていく。評価を変えることは、授業を変えるための手段に過ぎないと言っても過言ではないでしょう。評価規準を作ることが本来の目的ではありません。また、そんなもの作らなくても、授業に自信があるとおっしゃる先生もおられるでしょう。たぶん、その先生の授業は、生徒にとって「わかる授業」「学ぶ意欲が見いだせる授業」となっているのです。こうした授業は先生の頭の中に「達成目標」が揺るがず存在し、生徒とも共有化されているのではないのでしょうか。しかし、多くの先生方は、(僕も含めて)自信がない。

なぜ、評価改善が求められているのか。生徒と学習する目標を共有し、日々の学習にもっと参加をしてもらいたい、生徒に生きる力を身に付けてもらいたい。そのためには授業を見直してゆかねばならない。そのための授業や評価の見直しの作業とご理解下さい。

相対評価じゃ何でいけないのだろうか？



「評価規準」という「学習の質」で評価することの客観性への不安、授業者間・学校間の格差への不安から「相対評価」じゃ何でいけないのかという声もあります。「相対評価」は、「集団に準拠した評価」です。集団全体に学ぶ意欲があり、競争原理が働いている場合には、効果が期待できます。しかし逆に、授業をやらなくても平均点60点のテストを作れば評価することが可能な評価なのです。もちろん、相対評価を否定するものではありません。競争力が働けば、その良さは有効です。「目標に準拠した評価」(=「絶対評価」)が出てきた背景には、生徒の学力保障や生徒に身につかせる学力の質の問題、説明責任などがあります。

まずは、各先生方でご自分の教科での「確かな学力」の付け方をそれぞれ組み立てることが必要だと思います。これが、「学習目標・指導目標」であり「評価規準」です。導入では具体的世界を体感させ、その原理原則を思考させてから知識理解に入る教科もあれば、知識理解を最初にピシバシやって問題解決の自信がついたら、応用として具体的な世界に入る教科もあるでしょう。5分でできる課題もあれば、1週間かかる課題もある。しかし、そこには必ず段階を追った「学習目標・指導目標」があるはずです。これまでは、「学習内容」(教科書p～)と60点平均のテストでの評価でした(が多かったと思います)。「目標に準拠した評価」とは、「学習目標・指導目標」という質に照らして評価をしていこうという評価です。

評価の客観性への不安



評価には、客観性に対して妥当性という視点があります。どちらが大事でしょう。先生の出した評価に対して、出された生徒も他の生徒も妥当であると思えることのほうが大事なのではないのでしょうか。また、60点平均だが知識や技能詰め込みで、3日で忘れてしまうようなテストが妥当だとは思えません。その意味で、学習目標を生徒と共有することやハードル(評価規準)をしっかりと見せることで、生徒の自己評価、相互評価、教師の評価の3つが一致できるようになることが理想の評価像なのでしょう。そのために、評価規準や観点をしっかりと定めることが、妥当性と客観性を保つ秘訣といえるでしょう。

観点別評価の例として、芸術の評価について考えてみましょう。作品の評価と教科としての評価(評定)を混同してはいけません。作品のときは悪くても、授業に取り組む姿勢が評価されることもあります。あくまでも、学習目標に照らしての評価です。観点別評価とは、一つの作品を多観点から見るのではなく、作品の結果だけで教科としての評価をしないことなのです。



